

群馬県民俗調査報告書第五集
群馬県教育委員会編

境の文化

群馬県民俗調査報告書第五集

境
の
民
俗

序

ここに群馬県民俗調査報告書第五集「境町の民俗」を発刊しまして、広く県民の皆様、学界の方々等ご利用いただけることを衷心よりよろこばしく存じます。

民俗資料を調査して記録を作成保存し、これが地域社会の文化的創造と発展に活用されるよう努めることは、文化財保護行政上重大な責務であり、県教育委員会では、昭和三十三年度より毎年県内研究家の協力を得て民俗調査を実施しており、今回は昭和三十七年度に調査した結果をまとめたものであります。

境町は武士古墳群を地内に持ち、中世期には新田莊、淵名莊に属し、さらに近世においては日光例幣使街道の宿場として、また利根川舟運の河岸を控え発展したところであり、東毛平野地帯の民俗伝承をさぐるには興味深いところであります。

今ここにこの調査書を刊行するにあたり、境町当局をはじめ、町民あげてのご協力、調査委員の献身的な努力のあつたことを附記して各位に深甚なる感謝を表する次第であります。

昭和三十九年三月

群馬県教育委員会

教育長　田　　村　　遂

発刊まで

昭和三十三年度よりはじめた民俗調査は、利根郡片品村、多野郡上野村、邑楽郡板倉町、吾妻郡六合村を対象として実施し、群馬県の四隅の山村の調査は一応完了したので、県の中央部を対象として調査することを検討していたところに、たまたま、昭和三十八年度において民俗資料緊急調査（国庫補助事業）の実施がほぼ確実なものとなつたので、中央部を東毛、西毛に分ち、各一ヵ所を調査することに変更し、東毛は佐波郡境町、西毛は北群馬郡棟東村を調査し、群馬県の民俗の一応の概要を把握することにした。

しかし、從来は年度一ヵ所であったのを二ヵ所にしたため、調査委員を二分せざるを得なくなつたのは残念であった。

調査は、県教育委員会と境町教育委員会および棟東村教育委員会の共催のもとにおこなわれ、境町においては地方史研究会の方々に、棟東村においては小中学校の社会科担当の先生方の献身的な協力を得た。

調査期日および調査委員は次のとおりである。

佐波郡境町 昭和三十七年八月六日より九日まで三泊四日（境町長光寺合宿）

氏名	役	職	調査地区	編集分担
木山 十九	県立沼田女子高等学校教諭	東新井・保泉	小此木・中島	言語伝承、人の一生
山口 丸野	群馬県文化財事務課委員	伊与久・南米岡	上田名・女塚	生業、労働交通、信仰
原 規矩	藤岡市立第一小学校教諭	木島・上矢島・伊与久	衣食住、族制	年中行事、社交、贈答
弘 一	前橋市立図書館学校教諭	全地域（芸能）	境町の郷土芸能	
福正	群馬県文化財事務課委員	全地域（石造物）	下田名・上武士	
明郎	県教育委員会社会教育主事	全地域	村組織	
肝七	前橋市立女子高等学校教諭	全地域（民家）	境町の民家	
虎雄	群馬県文化財事務課委員	全地域	芸能（一部）	境町の展望、境町の部落概観、
進良	群馬県文化財事務課委員	全地域		
巳一	群馬県文化財事務課委員	全地域		
勇	群馬県文化財事務課委員	全地域		

北群馬郡棟東村 昭和三十七年八月十七日より二十日まで三泊四日（棟東村役場宿）

氏名	役職	調査地区	編集分担
相葉田井今矢阿久井津見福勝七	文学博士 群馬大学学芸学部長 県立博物館学芸員 前橋市立女子高等学校教諭 群馬縣文化財専門委員 前橋市立藤枝小学校教諭 民家研究家 『』	八ヶ街道、西帝、上サ 櫛沢、中組、宮室 桃泉、関谷驛、下之原 八幡、宿、新保 道城、新井、猿熊 金地城（民家） 南新井、井戸尻、倉海戸 全地城 南新井、井戸尻、広馬場	縁起と民俗との接点（総説） 族制、人の一生、食事、年中行事 生業、労働慣習、衣服 村組織 贈答、社交、言語伝承 住居 交通交易、芸能、信仰
近藤田井善宗	『』	『』	『』
多喜久	『』	『』	『』
矢島一郎	『』	『』	『』
安秀雄	『』	『』	『』
夫仲	『』	『』	『』

棟東村教育委員会社会教育主事
『』

南新井、井戸尻、倉海戸
全地城
南新井、井戸尻、広馬場

調査地域の概況

右の表でわかるように、調査委員は各地区の調査を担当し、民俗の各項目を調査したとは限らず編集、解説のみを担当した。
なお、本書の編集については次の点を配慮したので、凡例をかねて記す。

- 一、資料の提供者を明記すべきであるが、部落ごとに数名から一齊聴取したため、省略し、部落名を末尾に記すことに止めた。
- 二、文中ゴシック体を用いたものは、特に民俗学上重要なものの見出しの便をはかったためである。
- 三、目次には文中の小項目まで収録し、索引に代えた。

四、全体の編集、校正は前橋市立女子高等学校教諭井田安雄、箕郷中学校教諭近藤義雄および県教育委員会社会教育主事磯貝福七があたった。

本書は調査終了後、一カ年余を経てまとめられたものであるが、これが刊行にあたって井田安雄氏の校正ならびに目次作成についてのご尽力と朝日印刷工業株式会社の出血的な奉仕により今日発刊に至ったことを記し、謝意を表する。

昭和三十九年三月

境町の民俗 目次

序	大字南米岡—概観・坂碑	云
発刊まで	大字平塚—概観・馬頭觀世音塔	元
口絵写真	大字鳥村—概観・金井鳥洲墓と香山樓・板藏・縣宮鳥村渡舟場・島村兼種組合	元
境町全図	大字中島—概観	元
交通路	大字小此木—概観・真言宗福寿院・小此木長光館跡	元
川路・陸路	大字下武士—概観・城山百夷申	元
機業・商業・農業	大字伊与久—概観・史蹟五個堂跡・雷電神社・寿久茂塚・伊与久沼	元
経済	大字東潤名—概観	元
境町の部落概観	大字東新井—概観・獅子舞	元
大字境—概観・三夜堂・本陣・天台宗長光寺・乾瀬場と純正舎	大字東下潤名—概観・大國神社・妙真寺・獅子舞	元
大字伊与久—概観・史蹟五個堂跡・雷電神社・寿久茂塚・伊与久沼	大字下矢島—概観・徳宗寺・上矢島獣子組・御嶽教在原講	元
大字東潤名—概観	大字木島—概観	元
大字東新井—概観・獅子舞	大字下潤名—概観・大國神社・妙真寺・獅子舞	元
大字木島—概観	大字百々一概観	元
大字百々一概観	大字下矢島—概観・徳宗寺・上矢島獣子組・御嶽教在原講	元
大字木島—概観	大字木島—概観・真福寺・三ヶ木城址	元
大字西今井—概観・今井雜義館・日蓮宗妙見寺	大字西今井—概観・今井雜義館・日蓮宗妙見寺	元
大字三ツ木—概観・真福寺・三ヶ木城址	大字三ツ木—概観・真福寺・三ヶ木城址	元
大字安塚—概観・薬師堂・法華寺	大字安塚—概観・薬師堂・法華寺	元
大字栄町—概観・清泉堂と頤壽寄進手洗跡	大字栄町—概観・清泉堂と頤壽寄進手洗跡	元
大字北米岡—概観・繩文時代住居跡	大字北米岡—概観・繩文時代住居跡	元
序	はじめに	元
発刊まで	1 農業・農事	元
口絵写真	2 畜産	元
境町全図	3 織物・蚕飼育法・蚕祝い・郷の変遷・郷神	元
交通路	4 藤玉・藍ネセ	元
川路・陸路	5 職人の村	元
機業・商業・農業	6 災害	元
経済	7 おまけ	元

霜害・洪水

労働

はじめに

1 労働

2 労働を評価する慣用語

3 一人前

4 雇傭関係

交通

はじめに

河川交通

人的一生

出生から誕生まで

木島・上武士・下瀬名・中島・東新井・伊与久

育児

子育の神・春竜馬主・桔子・子供の厄年・虫封・ハシカ・ホウソウダナ

子育の道具・子墓

婚姻

下瀬名・木島・伊与久・上矢島・東新井・中島・小此木

若者組

厄年

族制関係語彙

村組織

はじめに

村の役人・村寄合・村仕事

伊与久

年中行事

はじめに

一月

元日（年神廟・年男・若水・朝湯・初参り・年始・縁起・食習慣・正月の門付け）・二日（仕事始め）・四日（お棚探し・寺の年始・ナベカリ）

五日・六日（山入り）・七日（七草がゆ）・十一日（食開き・くわだて）・十二日（道祖神）・小正月（もの作り・まゆ玉・オタキアゲ・飾りかえ・成り木の呪い・針供養・十五日がゆ・果樹販賣・大般若）・十六日（ジオノさまの日・やぶ入り）・十八日（十八がゆ）・二十日（二十日正月・エビス講）・二十四日（赤味講）・二十五日（雷電神社新年祭）

二月

一日（次郎の一日）・二日（出がわり）・三日（節分・ヤカガシ・豆まき）・初午（カイコ神）・種荷祭・八日（ダイマン節供・こと・針供養）・十五日（梅若）・二十一日（大瀬参り・春祭り）・二十七日（ひな市）

三月

三月節供（ひな飾り・贈答・食習慣・いわれ）・波岸・地神講・春祭り

天神講

四月

八日（おしゃか様）

五月

八十八夜（シモツブタ）・五月節供（フキゴモリ・のぼり・こいのぼり・贈答・食習慣・セヂマ・八日節供）

六月

一日（八丁じめ）・カイコ祝い・田植え（マング祝い・サナブリ・半夏）

七月

一日（カマノロアキ）・七晩け（一・七日）・辻念仏（一・七日）・七夕（たなばた祭り・慕そうじ・いわわ・その他・食習）・盆（日取り・盆迎え・盆明・無縫仏・新盆・生き盆・盆送り・食習・盆おどり）・七晩どうろ（十七・二十三日）・地蔵のあれ（旧七月二十四日）・夏祭り・農休み

八月

一日（ハツサク節供）

九月

一百十日・一百二十日・彼岸・社日・天道念仏・まんどうかつき・十五夜

十月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

十一月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

十二月

一百十日・一百二十日・彼岸・社日・天道念仏・まんどうかつき・十五夜

一月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

三月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

四月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

五月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

六月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

七月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

八月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

九月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

十月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

十一月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一二月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一三月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一四月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一五月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一六月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一七月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一八月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

一九月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二〇月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二一月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二二月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二三月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二四月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二五月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二六月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二七月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二八月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二九月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

二十月

一日（神送り）・オタンチ・十三夜

嫁が客に行く日
南米岡・上矢島・木島・小此木
二六

はじめに
一 神社信仰
二 講
三 俗信
一 神社信仰
伊与久の雷電神社（元旦祭・年始日・祈年祭・春祭・八丁じめ・夏祭・秋祭・七五三・大麻・雷電神社の由来・雷電神社の雷除け・巫影神社）
若宮稲荷・八幡神社・大国神社・大杉様・屋内の神・ハツチヨウジメ・荒神様
二講
一 月待ち・日待ち（オヒマチ・一夜さま・三夜待・三夜様・二十六夜・地神様）
二 庚申講・(3)その他の講（三夜沢講・八海山・テントウ念
三俗信
一 俗信の当体（人をほかす動物・オサキ・モモンガ・アズキトギ・はうそく神・タタリ山・タタリ畠・疫病よけ）
二 予知・(3)禁事・(4)呪法・(5)願掛けとお礼詠り（左つこぎの庚申さま・いぼ神さま・べつちよ
観音・北向地蔵・秋葉様・社宮司稲荷・音觀音・背たけ地蔵・楚石・子育地蔵・山王様・西今井の薬師様・友庵地蔵・妙天様・機神様・山王様・雷電神社・いぼ地蔵・猪薬師・三平稲荷・乳松・祈福坊様）
四講
一 伝説
二 怪異
三 へビ・ヘビの子
四 命名
五 あだな・地名
六 言語
七 しゃれ
二七

童唄(二)
附(一)登古路言葉・ところ言葉解題

境町の郷土芸能(二)
第一民謡

一、赤穂節・二、八木節・三、桑摘み唄・四、糸ひき唄・五、舟唄

六、土羽打ち唄・七、地錆き唄

第二演芸(一)
一、地方歌舞伎(上武士の芝居舞台・平塚の舞台)・二、人形浄瑠璃

(一)平塚人形(女塚の人形芝居)・三、説教節・女塚の屋台囃子・獅子舞・村にきた芸人・気楽流古武道

境町の民家(一)
一、解説

二、庶民のスマイ

田ノ字型マドリの農家・伊与久西番場の所見・街道筋の町家造り(片側スマイ)

三、支配層のスマイ

四、新野の板倉

五、境町の工匠(妙勒寺音次郎について)

天保十一年境町中沢家年中祭記

三夜沢講連名帳抄録(嘉永七年~昭和三十八年)

資料篇

- 利根川原の醸造(二)・蘭商(五)・例幣使街道の道標(二)・田島弥平著
養蚕新論(二)・くだまき(二)・酉の市(二)・砂利採取船(二)・鍛冶屋
の看板(九)・ほうれんそうの出荷準備(二)・ほうれんそうの間作(二)
境地区的三夜堂(三)・本陣玉闕(境地区)(三)・蘭賣いがもつてある
いた紙井(二)・五條堂跡の茅葺の碑(二)・氣楽流古武道(二)・道路
工事(木島)(二)・妙見寺のお会式(三)・錦織機(女塚地区)(三)
昔使われた花火の筒(三)・板倉(島村新野地区)(三)・蚕種紙の刷込
み(三)・聖德太子碑(小此木地区)(三)・地獄図(三)・中島の民家
(元)・昔の図絵に載った小此木の浅間社(四)・イザリバタ(五)・藍
のうとときね(小此木)(四)・中島の民家(四)・浅間焼けの流死人の
靈を供養した石塔(三)・渡良瀬川(三)・中島の子育て地蔵(九)・嫁
がかぶった鶴帽子(五)・イモビツ(五)・墓(五)・くわだて(二)・
年神牌(九)・小正月のマユ玉飾り(九)・うじ神の飾りかえ(五)・成
り木の鳴い(九)・エビス講(五)・シモップタ(二)・こいのぼり(二)
(二)・八丁じめ(二)・盆棚(二)・新盆棚(二)・蓋影神社(三)
境地区的お日待の帳面(三)・庚中の掛軸(三)・三夜沢講(三)
八海山登拝講の掲示(三)・山王の猿(三)・同上の奉賽物(三)
甘酒ばあさん(三)・上武士の民謡をうたってくれた人々(九)・平塚
の人形衣裳(二)・平塚の一人違ひ人形のカシラ(二)・上武士の舞台
用の下座(二)・一人違ひ人形のカシラ(二)・平塚人形三人違ひのカ
シラ(二)・若女形のカシラ(二)・カシラと胴輪をつける(二)・
耳の動く珍しいカシラ(二)・カシラの一つ(二)・衣裳箱と福島孝さ
ん(二)・豪華な衣裳の一つ(二)・衣裳の墨書き(一)・(二)・衣
裳の墨書き(三)(二)・説教節の台本(二)・若太夫の台本のはし書(七)
(一)・女塚の屋台囃子(二)・下潤名の獅子頭(二)・伊与久西番場吉
沢功家(二)・(二)・伊与久堀谷伝家(二)・上武士松島茂家(二)
(一)・境田島正雄家(二)・境田本陣鐵間良訓家(二)・(二)・(二)
(一)・下潤名大國神社(二)・岬時雨ふる境の裏通り(二)

図版・表目次

- 婚礼の座敷（木島）（五）・とりむすびの席・いちげんの席（伊与久）
(六)・婚礼の座敷（中島）(六)・真下家の正月の食事（伊与久）(六)
平塚人形一人遣いの足・同上さそり手（六）・同上一人遣いの手（六）
同上胴輪（女形用）（六）・同上三人遣い胴輪・竹田奴カシラ（五）・
マダガが逆立つ仕掛けのカシラ（茶利）・立役カシラ（五）・伊与久吉沢
功家平面と断面見取り・建物配置（六）・伊与久西番場 塙谷伝家平面図
(六)・上武士松島茂平家平面図（六）・境田島正雄家平面図（六）・
境田本陣城間良調家古図（六）・織間家平面図（六）・新野栗原清一家
の板倉平面と詳細図（六）・同上詳細図（五）

利根・広瀬川合流点(平塚地区)



利根川の渡舟場

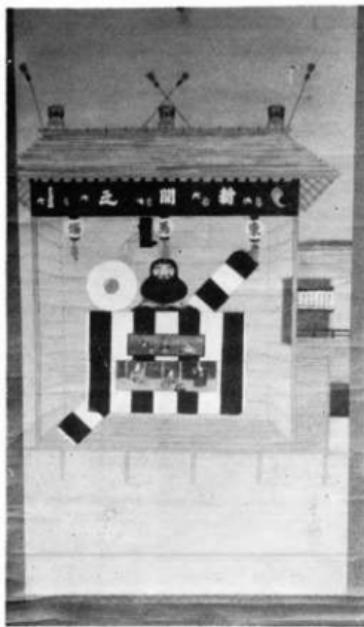


平塚河岸問屋北清(平塚地区)





伊与久雷電神社



雷電神社正遷宮大祭礼のつくりもの（絵）①
明治21年旧正月24日（213頁参照）



同左 つくりもの（絵）②



機 神 さ ま



二十二夜さま縁日（境地区）



下潤名の山王さま



東新井妙天さま

人の一 生（米寿）

（赤いきんに、ちやんちやんこで赤たび）



北米岡 甘酒婆さん

姥石と甘酒の竹筒



じぎよう（伊与久）



群馬県郡境町全図



助勢要道

历史故事 13



新田嘴

尾島町

大里郡

三

玉

四

縮尺 1/20,000

20

境町の展望

赤城山の噴火と利根川

群馬県佐波郡境町は県の東南部に位し、海拔四〇—五〇メートル、一帯の平坦地、面積は三一・五九平方キロである。昭和三十五年の国勢調査によれば人口二七、五八三人、世帯数五、四五九戸、人口密度は一平方キロ八七一人、一世帯五・一人に当る。町の西端を粕川が北より南下して広瀬川にそそぎ、広瀬川は町を西から東南に流れ利根川に合する。利根川は町の南部の島村地区を一分して西から東に走るわけである。この附近の利根川巾は約一、〇〇〇メートル。

しかし農業用灌漑用水は利根、広瀬の両川から得ることが出来ず、町の北方から東南に流れる早川を第一とし、次に粕川を取り口とする佐波新田用水がある。一部大正用水の水利地区があるが、近時上流地区的開田があり、植付時の引水は不可能の状態にある。その他伊久沼等の小さい沼と長溝川、にら川等若干の小流、湧水があつて、田植時の植付不能という事態はほとんどない。

町の北半分は昭和に入るまで平坦な山林が連なつていたが、日華事変以来急速に開墾がすんで昔の山林の面影は全然みられない。最近の土地構成比は水田が一七パーセント、畠四六パーセント、宅地八八パーセント、その他二八パーセントで、山林は〇、三パーセントに過ぎない。利根、広瀬両川の河川交通の便があつたので古くから住民の土着があつたと考えられ、縄文文化時代や弥生土塙住居跡が多数あり、何百の古

墳群が存在する。鎌倉時代には碑村世良田にあつた新田氏の領有するところであり、戦国時代には太田金山の城主由良氏に属し、江戸時代には半分を伊勢崎藩酒井氏が領有、半分は旗本領および天領であった。

明治初年連合戸長役場以前は約三〇の村落に分れていたが、明治二十二年町村制の施行によって大字伊与久、上瀬名、下瀬名、東新井、百々、木島は合併して采女村となり、小此木、中島、下武士、上武士、保泉地区は剛志村となり、前河原、島村地区は合併によって島村を成した。昭和三十年境、采女、剛志、島の一町三ヶ村の合併によって境町となり、さらに同三十二年世良田村の上矢島、西今井、三ツ木、女塚、境、北米岡、南米岡、平塚地区が合併して現在にいたつた。境の地名が文献にあらわれるのは世良田村長樂寺僧義哲が永禄八年に書いた「永祿日記」が一ぱん古い。境町と称する由来は佐野郡、新田郡の郡界にあるのでかく呼んだと故老はいう。赤城山噴火の火山灰が降り積つた大間々扇状地帯の南端にあたるため、町の大凡七〇パーセントを占める北部地帯が関東ローム層で、水利を得る水田と桑園であり、米麦二毛作と蚕養を行なう。南部の三〇パーセントに当る地域は広瀬川氾濫原の堆積地で沖積底地にのぞむため肥沃な畑地桑園をなしている。養蚕と野菜栽培には最も適した地である。降雨量は県内でも少ないと江戸時代は雨乞いのため三夜沢の赤城神社に代参を出して御神水を頂く(木島地区)といふはなしや、世良田八坂神社のお獅子をかりてきて町中を廻す(境地区)など多くの昔がたりや記録が残されている。

このように肥沃な土地と河川交通にめぐまれていたが一部の地域をの

ぞいては農業の開発がおそく、長い間原野山林のままであったと思われる。境地区は一面の萩の原中に開かれた街並でいまに萩原の地名を残し、小此木地区は柴草が生い茂っていたので小柴村、のちに柴の字を割いて小此木としたといわれる。かかる字名は無数にある。伊与久地区的明神山、秣場原、上瀬名地区的幾世林、金山、衣服林、東新井地区的御山分、山中沼等はその例である。

鎌倉時代に藤原世良田を新田一族が本拠として城を擇うにいたって境内にも新田の支族の存在がみられ、戦国時代金山城の由良氏の領有となり、天正年間由良氏没落のあとその部将が多く土着帰農した。町に新田支族や戦国部将を名乗る旧家が多く、高井、宮崎、吉沢、深町、大谷を伊与久五箇とし、宮内、石井、大須賀、生形を下瀬名四箇、中沢、井上、内田、鐵間、中村、飯島を境の六箇などと呼んでいる。いずれも旧家なるを誇る称呼であり、この旧家は多く系図を大切に保存している。落人説には中島地区の楠沼二家が南北朝時代この村に土着したといい、

南米岡地区栗原真之丞家は武田信玄の遺臣であるという。落人説は枚挙にいとまがない。各地区とも神社縁代はなりてがなく困っているが、寺世話人は旧家の人たちが永年つとめている。本筋に当れば零落した

現在も家柄によって寺世話人をつとめ、財産を築きあげた有力者でも新宅や新しい軒入者ではお寺の役はつとめられない。あらゆる名聲職をやつたが、まだやらないのは寺世話人だけだと不足をいう老人がいる。旧家がハバを利かす例として境町地区がある。ここは斎藤、鉄川、大谷、新井二家、栗原、須田、福島姓の八家が從来旧家とされて村の世話人的存在であり、いまもこの地区をハチヨー（八戸）と呼ぶ。

こういう旧い習慣も島村地区にはない。利根川の両岸に点在するこの村は明治御一新のあと急速に新文明をとり入れた。それは大部分の村人が舟頭でつねに東京を舟で往来して文明開化を自分の眼で見てきたからであろう。明治五年三井から七千円の融資をうけて蚕種製造の勧業会社を設立し、同二年田島武平らは伊米蘭園へ蚕種売り込みのために洋行

農 酪 原 川 田 村 地 区



した。明治年初年宗教の自由が布告されるといち早くキリスト教が入り、同二十一年には洗礼を受けたもの五六人がいた。乳牛を飼育して牛乳の販売をはじめたのもこの頃で、この進取の風氣はいまも村民を支配している。されば民俗学の対象となる俗習、習慣等はどうの昔にとりてられてまつたく近代化した文化村であるため、今回の民俗調査もこの地

した。明治年初年宗教の自由が布告されるといち早くキリスト教が入り、同二十一年には洗礼を受けたもの五六人がいた。乳牛を飼育して牛乳の販売をはじめたのもこの頃で、この進取の風氣はいまも村民を支配している。されば民俗学の対象となる俗習、習慣等はどうの昔にとりてられてまつなく近代化した文化村であるため、今回の民俗調査もこの地

交 通 路

川 路

陸路の不便な時代の交通は利根川、広瀬川が重要な交通路であり、文化的の流入口であった。平塚河岸、島村河岸、中島河岸は境町のもの有力な舟着場であり、とくに平塚河岸は江戸文化の上州へ上陸する重要な閑門であった。江戸通いの駕船といふ大船はこの附近より上流へさかのぼることが出来ないので、これから上流へは荷物をハシケに積みかえてのぼった。平塚河岸は元禄のころまで足尾銅山の粗鋼を江戸へ送り出す舟河岸で、平塚から陸路を北へ新田町高尾、大原、大間々を経て足尾に至る道筋をいまでも「あかがね街道」と地元の老人は呼んでいる。元禄のち足尾銅の積み込みは二ツ小屋河岸にかわったが、その後も平塚河岸は御年貢米や大豆糸、太織、監玉等の送り荷と、砂糖、塩、わただる（肥料）、うすべり、薬種などの着荷で盛んであった。そのころ北清、京屋というような河岸問屋が七、八軒あって、立流の荷藏が川辺りにならんでいたといふ。北清はいまも河岸問屋の面影を残るものとしてなつかしい。したがつて村の人はほとんど舟頭と馬方だった。河岸問屋から馬に荷をつけて土堤を下るとこに江戸の詩仏の筆になつた馬頭観世音塔があつたが、縱横とも見あけるほど大きく立派な石塔は県内最大のものであろう。明治になって上野、高崎間の鉄道がしかれると舟河岸はバッタリとさびれ川路をゆくものはなくなつた。この須利根川に架した舟橋をテトテトと吹くラッパの音とともに境一深谷間の馬車が夕日を浴びながら渡つたそで、故老の語り草になつたなつかしい風景である。

中島河岸は平塚河岸のすこし上流にある廣瀬川に設けられた舟河岸である。ここには代々井上重兵衛を名乗つた河岸問屋があり、また伊勢崎藩の舟荷をあつかった御小屋と呼ぶ家がいまもある。村の北方の竿屋敷と称するところは舟の竿を切り出したからである。中島河岸から伊

勢崎へ通じる細い野道を「駕賃馬みち」とよぶ。道はたに五平方メートルほど他の村の飛び地があって、故老は駕賃馬の水呑場だったといふ。むかしこの駕賃馬を曳いたのはアネさんかむり、手甲脚脛の女馬子がほんどで、男まさりのカカア天下が、いい声で馬子唄をうたひながら伊勢崎へ通つたといふ。男はみんな舟頭で江戸から帰つて貨物をもらひと真っすぐに四キロほどある木崎宿の旅籠屋へあそびに行つたそうで、明治前年の木崎には三〇軒ほどの旅籠屋と一六〇人ぐらゐの飯食女がいた。比較的よい賃銀がそれたし、金ばなれの舟頭は木崎宿の一ぱんいお客様さんだったといわれる。

境では若者があまり木崎へあそびに出かけるので、安政五年に町中の連印で町規定書をつくつたことがある。木崎宿へあそびにゆくと五貫文の過料錢をとることを申し合せたが、十二月と翌年一月にたちまち違反者が出て過料錢をとりあげた例がある。

木崎女郎とかけて 夕立と解く

心は カサをしょって帰る

とこうたわれた。町規定をつくつても、木崎通いは止まなかつたと思われる。

島村河岸は利根の河中にあつた島村前島である。むかし前島と川水一筋をへて、上流の西島、前河原の三村は利根の洲中にあつたので、当時は各家に小舟があつて対岸と交通していた。年々利根の洪水はこの村々をつぎつぎに侵襲しては新しく洲をつくりた。村人はよく天気をみたそうで、丑寅の嵐（あらし）だと利根が満水し、辰巳の嵐は渡良瀬川に水が出来るといつた。洪水対策に悩んでいたし、利根の堤防が二メートルか二・五メートルよりなかつたので、満水になると前島へ水があがるより先に堤防から溢れ出る方が早かつた。満水は利根の洲中にあるより両岸の村々の方が被害があつたわけである。そのため今日は水が出ると感じると前島の人々は两岸から洲中のわが家へ帰つていつた。

常に満水騒ぎをした前島、前河原などはそのたびに山から流れる堆土によって肥料なしに桑園がよく育つので養蚕が非常に盛んであった。お蚕さまは桑の葉から幹の皮まで食つたもんだと古老が話す。その前島、前河原も明治四年の稀有の大洪水には一たまりもなく、人家と煙地の流域によつて全滅してしまい、政府によつて行われた利根の大改修工事により、わざかに土羽打唄をのこしてついに利根の川底に没した。大洪水の惨状はいまもつて村人の語り草であるが、百年の郷土を出るにのぞんで栗原武平といふ故人は断腸の一詩を賦した。

明治四十三秋

今古未聞大水難

漲溢流瀆如大洋

僅免九死一生

人畜死傷実無算

失家失難□空拳

人心惱々如戰國

當時慘状真堪憇 云々

そして前島の人々は両岸に移り住むことになつて、有力者の多かった北岸の人々はまず神社を北に移し、南岸の人はしかたなく残った学校と役場を南にもつていった。五十年を経たまでは「昔の人は馬鹿だったなあ、なんの役にも立たない神社なんかを取ってきて」と北岸の人はなげく。毎日子供たちを渡し舟にのせて南岸の学校に通わせるのに苦労するからである。ここには県営の利根川渡舟場があつて舟頭一人を常置する。

川岸の人はよく「川向うへ嫁にくれるな、川で行き来が出来なくななる」(平塚地区小林辨三さん)といった。いまは砂利採取船がたくさんあって終日ゴー音を立てているが、昔は筏が下つたのを年寄りはよく見た。筏乗りは沼田あたりの人が多く、江戸へ筏を送るところは陸路であるが、村から村へ名主の合意を得ながら届いていた。筏乗りや浪人者の合力は十二文と相場がきまつていて、名主の門に立ちさえすればこの合力は間違ひなく得られた。近年利根はだんだん水が少くなり、とくに昨年の渇水は甚しく、かつての前島護岸石があらわれたほどで、古老は五十年ぶりの渇水だといった。昔たくさんいた島村の舟大工もなくなつ

て、ただひとり栗原三五郎さんが利根河原で舟をつくっている。むかしあはえた説教節を口さみながら、墨糸をひいたり削つたりする姿はやがて見られなくなろう。三五郎さんは代々の舟大工で先代を千馬大工といつた。舟には生釣を用いる。生釣は曲りやすいので打ち込む調子がむずかしいという。千馬大工は

千馬がとつて／＼

おなみが食うから足んねえ／＼

と唄の調子に合せて釣を打つたという。さて、その子の三五郎大工の傍に立つと

三五がとつても／＼

ノーヤが食うから足んねえ／＼

と調子をとつていた。おなみは千馬大工の女房で、ノーヤは三五郎大工の娘だった。利根河原の舟大工は利根の風物詩としてなつかしい。

陸 路

東武鉄道(浅草伊勢崎間)が通り、境、剛志の二駅がある。境駅の乗降客はそれぞれ一日平均三千人を超える。通勤客が大部分である。鉄道は多くの旅客によつて利用され、貨物は自動車輸送によるものが多い。それは一帯に平坦であり、自動車道が四通八達するからで、境町から桐生道、太田道、小泉道、深谷東京道、本庄道、伊勢崎前橋道と四方への道が開かれている。旅客用バス路線は次のとおり。

境——豊受經由——伊勢崎間

境——采女經由——伊勢崎間

境——平塚經由——深谷間

境——西良田經由——本庄間

境——豊受經由——本庄間

境——大原經由——大間々間

境——大根經由——太田間

境——木崎經由——尾島間

以上は境を始発する路線で、境を通過するものに、前橋——境經由

林間がある。

実に各方面によく路線配置がなされ、道路の改良工事が寧日はなく行われているが、百年前まではいずれも草深い野道に過ぎなかつたであつて。町から伊勢崎にいたる道筋には、本多夏彦氏が調べられた円朝の物語りがある。講釈師三遊亭円朝が名作塩原多助一代記をまとめるために、腹案にある土地や人情を実際に踏査してある「上野下野道の記」にこの街道を通った記事がある。明治九年九月十日に伊勢崎を出た円朝は

……大橋方にて中食をして又人力車にて保泉^{久村}板前を渡りて雉子間百姓村より堺町に入りて藤屋と云ふ泊宿に休む、^{是迄伊勢崎より二里余秋葉の神}社あり、社殿雲龍の彫刻は精巧なり、此處より伊勢崎前橋別れ道の石坑あり、駅の出はずれに芭蕉の碑あり

是より女塚村^{新田郡}三ツ木より小角田村はなれ……

とある。講談多助一代記はこの旅のあとまとめられたが、塩原多助一代記中に出てくる境町の前後はあまり立派な場面ではない。惡業の限りをつくす般旅お角と道連れ小平の母子が岸田宇内娘おえいをかどわかす舞台で、保泉の原で娘をさらつて逃げ、その母親のおかめという若後家を手下の悪漢に引つかがせようという際どい幕である。円朝は境の道中で保泉のオカマツ街道の古い話を仕入れたことであろう。開墾される前の伊勢崎街道保泉の地は林のなかのうす暗い細道で、ここでよく娘がかづがれたといふ。いまもオカマツケードウの名は残っている。また寛政三年の夏、江戸から信濃の郷里へ旅立つ俳諧師一茶は、そがれをとぼと歩む傷心の一茶の姿はいまも目の前にあるようだ、

今昔の感が深い。一茶の訪れた専車はたまたま京都へ出掛けている。上連沼の栗庵假庵の高足で、一茶来境の四年後に

散る花も夢に見し哉花七日

の句を残して没した。京都の蘭更は深く専車の死を惜み「陽炎に亡名ととめむしの面」と追悼の句をおくつた。

中山道貞貧宿から分岐して五料を渡り、境を真っすぐ西から東へ抜ける道が旧例幣使街道で、町の発展もこの交通路の開発にあつた。寛永二十年秋の原のなかに幅一四メートルの道路が出来て、新道路の両側へ元屋敷から移転した。このとき何故に道路に面してノコギリ形に家を建てならべたのであろう。この家の廻てかたはそのまま三百数十年うけつがれて今も家が斜めに建てつらねてある。古老はいう、弓矢の戦いのとき死角となつて矢を防ぐに好都合だからと、

またい、真南に向つて家を建てると陽当りが良いからと、ともあれいざれもななめ道路に向つた店舗の構えは不体裁不便をまぬかれないと。

さて、京都を発した例幣使は広瀬川渡して下武士に入る。むかし約一〇メートルにすぎないこの川に架橋を許さなかつた江戸幕府は下武士、上武士、保泉三ヶ村に渡舟役を命じ



蒲商（境地区）

（家が道路に対して斜にたてられている）



例幣使街道の道標
(境 地 区)

た。架橋したのは明治十九年で、那須野へ狩りしたとき、上野国新田館に廻り、ここに浴みたといふ伝説がこれである。源平時代の伝説は数々あって、義経が奥州落ちたものに高札と番小屋があり、村人の入れで橋の権利を得、橋銭を徴して營利とした。この橋銭を惜しむものがあつて「橋銭はけえりだ」といって無貨で渡り、帰りは他の橋を渡つて帰ることが多かった。附近の人はこれを「けえり橋」と呼んだ。この橋の下流にあるのを「こんらわ橋」、その下流にあるのを「うつかり橋」とよんだ。いずれも無貨で渡るのを自慢合つたのである。昭和二年秋キティ颶風はけえり橋を押し流し、随所に氾濫して一衣帶水である。伊勢崎から流れてきた無数の人家はうつかり橋へつかえては水に没した。水のひいたあと、附近的田畠に死人の骸が転がつて實に惨憺たる有様だった。

下武士渡しの東に一里塚があつて、例幣使街道はこれを「一里松」といつた。一里松から狭い羊腸とした旧道があり境の丁切にいたる町の隅に丁切と呼ぶ木戸があつて町の出入を固めたわけ、丁切が高札場とともに取り扱われたのは明治七年のこと。當時の本陣は今もよく遺構を伝え史蹟として保存される。例幣使街道は町の最大の苦勞であつて袖の下がないと駕籠からわざと転がり落ち、かつぎかたが悪いといって無理難題をふつかけては、なにがしかの金子を掠めたそうで「例幣使の駕籠落ち」は今も口碑に残されている。神宮寺跡地蔵堂は出迎えをしなかつたので閉門を食つたとは年寄の話。

例幣使街道は町のはずれから北行して女塚地区に入る。ここに「湯の

道」の道標があつて、東へ三〇〇メートルほど入ったところに薬師鉢泉がある。湯殿山玄海という名があつて古い名湯で建久四年四月源頼朝が那須野へ狩りしたとき、上野国新田館に廻り、ここに浴みたといふ伝説がこれである。源平時代の伝説は数々あって、義経が奥州落ちたとき辨度をともなつて通つたものこの道だという。

町を南北に通する道、それは大間々から境を経て、武藏へ通ずる江戸街道で、領主井氏が参勤交替に通つた道、その道中の前には沿道の村々に酒をつかわして道端の野草を刈らしめた。野草がお駕籠に触れるのを恐れ多しとしたためである。この街道は境を南へ出ると間もなく平塚渡しか中瀬渡へ出る。むかしは関所ならぬ渡し舟にも通行手形を要したものか一札がたくさん残されている。

一札の事

一、高橋久七介女武人伊勢崎御屋敷と江戸御屋敷迄罷越候、其元

舟渡し無相違御通可被下候為後日仍如件

安永丙午四月十三日

境 町

名主 清 兵 衛

右者江戸御屋敷北爪勘七様より手紙相添御願ニ付差出申候

現在境から通するこれらの道筋は近年改良工事が急速に進み、一帯平坦な地であるため旅客貨物とも自動車を利用する度合は非常に大きい。

經 済

町の経済生活は境の糸市にはじまる。寛永二十年に例幣使街道が出来上ると、その二年後すなわち正保二年一二月に二七の六斎市がたてられた。周辺農村に早くから養蚕が発達していたので下糸、綿太織の集散が殊に多く糸市と呼ばれた。當時村々の明細帖には大がい、「農業之間男は商渡世仕候、女は蚕仕糸綿太織真綿木綿類

機 梨

手業仕候」という項目があるのが普通である。したがって養蚕、蚕種、織物の研究は古くから盛んであって、下武士の石原佐市は桑の研究をかさねて遂に「佐市桑」の優良種をつくり、島村新地の田島弥平は「養蚕新論」正統七巻を著して世の激賞をうけた。また伊与久組勵業会社「養蚕の図」一枚は一陽斎豊国によつて錦絵に画かれた。幕末の儒者

寺門静軒は

境の糸市を

馬頭力争

「……多輪

死、駅市徒

是月繁昌、

洋銀舗地殆

如水……」

といった。

村の人々

は四〇〇グ

ラム位すつ

に束ねた下

げ糸を、あ

るいは行李

に入れて背

負つて糸市

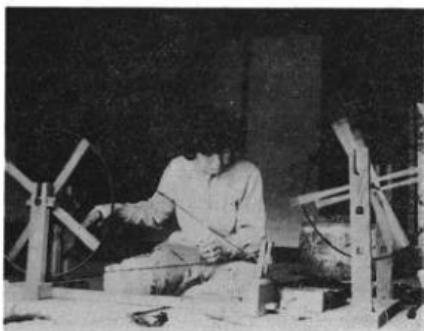
で売つた。

文政一〇年

糸買商人の

数は境三三

人、他所商人と呼ばれるもの八六人、いかに糸市が盛んであったかがわ



くだまき

かる。糸市は大道にムシロを敷いて糸買商人が出張つたが、明治になると店内で取引されるようになり、明治二七年町の北裏に「貿場」を建て、売買が行われた。しかし市はこの頃をピークとして糸、織物の取引の主力は漸次伊勢崎へ移つて、貿場は間もなく閉ざされるに至つた。そして背負子でハタシ廻りしていた太織機の機屋も次第に伊勢崎銘仙によつて変つた。上武士の森熊は佐波郡隨一といわれる織元で、明治二年の製造高は一〇、一三九疋、勿論佐波伊勢崎方面には森熊に拮抗する織元はなかつた。

明治以降町の景気は機屋が左右するといわれ、町の大部分は機屋、糸屋、紺屋から糸巻き、販賣など織物に関連した仕事にたずさわつた。どの村へいっても、町の裏通りにも糸返しする座繰りの音か、機械のオサの音を家毎に聞くことが出来た。多くの機屋のうち大半は「三疋機屋」と称する小資本の織元で、少しの糸や屑糸を寄せて、カスリしばりからマキ屋の仕事も一切夫婦でやり、自転車でわずかなハタシ廻りをするわけで伊勢崎一六の六齊市に三疋程度の銘仙しか持ち寄せられない。一ヶ月一七、八疋の銘仙を売つて親子三、四人で食いつなぐ機屋で乙部の買織商相手に現金売りをするわけ

で、伊勢崎地方特異の呼名であった。何十年の歴史をもつこれら三疋機屋は一〇年ほど前の鉢仙の大不況によって悉く廃業し、少數の資本力のある大機屋だけでウール織物に移つてしま非常な好況にある。ながい間織物はほかに大企業のなかつた境町の経済を牛耳り町民の関心は常に織物の好況不況に注がれていた。現在の織物業者は金融との密接なタッチと完全な資本主義体制にある。ウール地の生産によつて好況裡にある織物業者に、古くからのジンクスがあつて、三代続いた機屋は一軒もない。明治期に佐波郡唯一をほこつた上武士の森熊も一代でつぶれ、今日の機業者はいずれも二代目ばかりであるから織物業者の浮沈はまことに恐しい。

江戸時代からの太織築が明治中期に銘仙となり、一〇年ほど前からウール地に変つた。また機屋はみんなもうけていると町の人はいう。その一因には生産過剰の心配がないということである。廢業した三疋機屋はそれぞれに安定した職を得て再び機屋をはじめる気配はないし、最近ゴム、電気、鉄工、脱脂綿等の企業が進出して、農村の稼働力をこれに吸収した。さらに女子に給料生活のあこがれがあつて地味な機織りを嫌うので織子が少なくなったからである。

農村部の商業転移は少ない。交通の至便のため消費經濟は主として境、伊勢崎に依存する。境の商業は立ちおくれており大資本の進出はみられない。それは商業組織が比較的封建的な性格をもつてゐるからで、一般商業者の金融機関への依存度は割合少ない。金融機関の貸出相手は大部分織物業者である。昭和三五年度の商工業者の製造および販売高をみると次の通りである。

商業者数

年間販売額

製造業者

年間出荷額

製造出荷額は電気機械器具、織物、ゴム製品の順であり、商業者のうち

四八一軒

一一億

七六〇軒

一三億



西の市(12月10日)

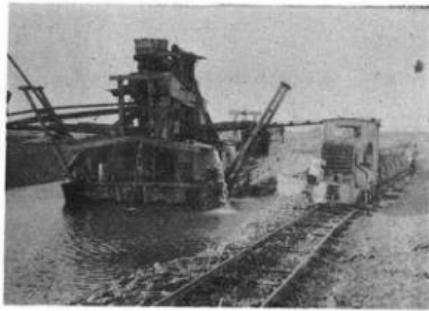
境町の有力な産業の一
つに蚕種がある。養蚕の
盛んなこの地方で島村蚕
種組合は古い伝統と蚕種
をもつことで知られる。

天保ころ島村の蚕種はま
だ企業化されず、もっぱ
ら奥州信州方面から蚕種
を移入して養蚕を行なつた。嘉永年間に至つて蚕種を営むものがあり、安
政年間海外輸出が行なわれるようになり、蚕種業者が続出して広く移出さ
れるようになつた。渡世に抜け目のない人たちは地元の生産が間に合わ
ないので信州奥州方面から仕入れて江戸、保土谷方面に充り込んだ。何百
両という資本を要するところから資力のあるものでなければ出来ない
し、統々発生した蚕種生産業者も村の有力者が多い。明治年間有力な蚕

種商は島村、平塚、小此木、伊与久地区に多く、いまも「俺のうちにも
とタネヤだった」というのは、村の資産家だったことを誇る謂でもある。
島村地区利根川は川巾広く、砂礫層は厚く土建業者に適当する粒状で
あるため、戦前より砂利採取が行われていたが、近ごろの土建ブームに

五〇パーセント余が食料品小売で、商店の分布は約七〇パーセントが境の市街地を中心いて存在している。商業者の一年中の最大の行事に「西の市」がある。例年一二月一〇日縁起物の市もあって、師走の町は賑う。

日縁起物の市もあって、
市街地を中心にして
ある。商業者の一年中の
最大の行事に「西の市」
がある。例年一二月一〇
日縁起物の市もあって、
師走の町は賑う。



砂利採取船

よつて盛んに採取される。これは県の免許許可を得て一定の地域より採取するものだが、全地域がこれらの業者によつて占められている。多くは自動車によつて東京へ出され、またトロッコで木崎駅へ出荷されるものもある。

小此木地区は江戸時

代鉱治屋村として有名で、ほんどの百姓が鉱治屋を渡世としていたという。おもに鍋釜の類をつくっていたが、職人村だけに太子講の祭祀が盛んであった。村内阿弥陀堂には境内にめずらしい太子像が残され、宇新田岸武雄塚内に聖徳太子碑が建てられている。現在太子講を行っているのは境の仕事舎、大工、左官、星根屋で組職する境四職組合で、数年前諏訪町三夜堂に新

鉱治屋の看板

の地であるから農業はかなり古くから行われたであろう。繩文晩期、土師文化の遺跡が多いことも住みよい地であったことを物語る。北半分の諸部落は大間々扇状地帯に属する関東ローム層で、水利を得て肥沃な水田地帯となつており、南部は広瀬川氾濫原の堆土による沖積地にのぞみ、陸稲、桑園、蔬菜栽培に適する畑地である。しかし昔は人工的水利を得ることなく、山林、原野に放置された原始的農業では収穫を期待することは出来ない。明治一年の「物産書上」によつて保泉地区の例をとつてみる。

小麦	八町二反歩	八石
粟	三町一反歩	一二八石
大豆	三町五反八畝	三九石
蕷	七町四反	八石二斗
甘藷	八反三畝	六石
實綿	一町八反	五、四〇〇斤
蕷	一二斤	
生糸	五、一八〇斤	
蚕種	二二八斤	
三九四五枚		

また太鐵第七〇定期後を織り出しているが、全村烟地で稻の収穫皆無である。「武士保泉は粟がら育ち」と與にうたわれたこの村では、常食に米を食うことがかなわず麦糀を食つていたのである。いま農業状態をみると当と隔世の感が深い。大正にいたるまで狐狸の飛び交つたという山林原野は昔語りとなり、一九四一平方キロの耕地面積をもつてゐる。水田三〇ペーント、畠三八ペーント、桑園三二

農業

(利根、広瀬、早川、柏川、佐波新田用水堀の流域、平坦地はかなり古くから行われたであろうし、繩文晩期、土師文化の遺跡が多いことも住みよい地であったことを物語る。北半分の諸部落は大間々扇状地帯に属する関東ローム層で、水利を得て肥沃な水田地帯となつており、南部は広瀬川氾濫原の堆土による冲積地にのぞみ、陸稲、桑園、蔬菜栽培に適する畑地である。しかし昔は人工的水利を得ることなく、山林、原野に放置された原始的農業では収穫を期待することは出来ない。明治一年の「物産書上」によつて保泉地区の例をとつてみる。

百分率である。最

近水稻の収穫は変らないが、大麦の植付は減じ、蔬菜類の栽培が急増した。

農村にも消費生活が進んで現金収入を必要とするから

で、蔬菜類には蓮蓬草、ねぎ、白菜、牛蒡、きゅうり、茄子、山芋等が多く、地味のよ

いことから蔬菜類一切の出荷がみられる。か

ほどに畑作地帯の農業形態は最近著しく変りつつあるが、北部地区の人が、南へは嫁にや

れないというほど夏冬通じて夜おそくまで働く。多角農業の可能な南部に比して北部水田地帯は青壯年層の工場勤めがふえつづける。工場の進出による雇傭の増大は農家労働をどんどん吸収するため、百姓仕事はほとんど年寄りが行なう。また若い女性も百姓仕事や機織りを嫌って工場会社へ通うようになった。女性が百姓仕事を嫌うので農家では嫁をもらうのに苦労するといわれる。

酪農は利根川を中心として非常に盛んで昭和三五年には八六六頭の乳牛がある。平均飼育数は一軒二頭に当る。雪印、明治の集乳園であるが、最近の傾向には飼育数の減少が目立ち、蔬菜栽培への転移がうかがわれる。役牛飼育も八六六頭、馬は一三頭にすぎない。耕耘機の普及度が非常に高いので、牛馬の飼育は施肥を得るためにある。年間取締量は



ほうれんそうの出荷準備

(島村地区)

三九八、三〇四キロ。

昭和三七年における各部落の戸数と人口は次表のとおりである。

境 部落名	戸数	人口
伊与久	一、六二二軒	七、二三三人
木島	四八六	二、七七三
百々	一六一	八六九
下潤名	一七四	八一八
上潤名	三九七	二、一一三
東新井	二三六	一、二六〇
保泉	一一五	六九五
上武士	二三二	一、一七九
	一八六	九八七



ほうれんそうの間作

(島村地区)

下武士 中島 小此木 平塚 北米岡 南米岡 中
北立 新島 島村新地 上矢島 三ツ木 女塚 荣塚

五、

西島前河原計 北立新島 島村新地 上矢島 三ツ木 女塚 荣塚 一、一九〇 一、一四八 三五二
六、 六八三七一九六七二六五五一六七七八一八二

二八、

二六人 三四三九六九四〇六四六六一七八四九九六九〇一六〇二九五七一三八三五六〇四五〇五九八二一、一八三九

境町の部落概観

大字境

境町の中心をなす町並で商店櫛比し、周辺に工場および住居が附隨する。東武鉄道境町駅があり、ここを拠点としてバス路線が四通八達する。役場、警察署、高等学校、小、中学校、町立図書館、登記所、乾糸所等の所在地であり、境町行政、文化、商業の中心部をなす。

奈良朝時代には附近の三村を含めたこの一帯を朝日之里といった。当時は一面の原野であったと思われるが、広瀬川舟渡し交通がはじまる鎌倉期にいたって渡舟場附近に集落の発生があり、朝日の里から分離して仮宿村をなした。いまの市街中心部はるかに北に移ったが、この広瀬川渡津地点に字エビ河岸があり、近くに元宿元屋敷と称する所がある。古くは世良田村長築寺領だったというが、戦国時代にいたると太田金山の城主由良氏の領有となり、由良氏の部将小此木左衛門長光が境城に拠つた。この城はまた仮宿城とも呼ばれるが、その後前橋酒井雅

使われていたとみられ、境という名称はこの頃にいたって唱えられたのであろう。

豊臣秀吉によって由良氏没落のあと福垣氏が領し、その後前橋酒井雅

弁財天を祀り毎年夏祭日がある。傍らに釣堀が設けられ、ともに釣天狗の場となつた。

伊勢崎藩二万石酒井氏の治政は、領主の保護のもとに境の商業は非常に盛んになった。町の有力者は積極的な資本投下をして糸、太織、蚕種渡世を行つた。大地主のいなかつたのはいずれも土地に執着をもたなかつたからで、江戸に番頭をおいて商いをし、また上せ糸の取引に京都まで出向く人も多かつた。これら的人は京都や江戸の文化をもたらし、とくに俳諧は盛んで有力な俳人を生んだ。また文化の移入者には例幣使の御通行があつた。毎年三月末から四月半ばまで毎日のようになに京都公卿衆が東下し、奉幣使は四月一二日諏訪神社の境内で御小体されるのを例とした。金幣の納めてある長持の下をくぐるとハシカがかるく済むというので、番人ににがしかの鳥目をやつて子供にくぐらせたといふ。

文化二年の「町方明細帳」によれば

家数 二〇六軒

その内商人

九三軒

職人

四六軒

商人宿

四軒

人数 八四四人

商人商人のうち店借人が六軒あつて、当時にあつては地方都市的な状態であつたろう。当時の町民家は二、三軒しか残っていない。近代化された町並に蕪びただけは昔のままの店構えをもち、いずれもトド啓などいう仇名によって営業を行つてゐる。

三夜堂



境地地区の三夜堂

諏訪町にあって、この境内には正保四年に神宮寺があった。神宮寺の廃されたのは何年か明らかでないが、その後この地を神宮寺跡地蔵と呼んだ。その頃地蔵堂の境内に諏訪神社、秋葉神社、銅仏地蔵があった。諏訪神社は享保一五年に大原の椎名氏が奉納したもので、高さ一・八五メートルの立派なものだったが、戦時中供出されてしまは台座だけが残されている。諏訪神社は明治四三年神社合併によつて嵯可比神社に合祀され、社殿は尾島町前小屋部落に売られた。下潤名の名工音次郎作といわれた彫刻の結構は町の人々に惜しまれたが、九尺四方の社殿は解体せずに平塚に運び、後で前小屋に下った。社殿のあつた地には寛延四年に植えた松樹があり、亭々とあるのみ。

三夜堂はもと地蔵といつた。天保八年に焼失してその後に建てたもので御本尊地蔵が安置される。大正にいたつて三夜様を祀り込み、毎月旧曆二三日を縁日として非常に盛つたが戦後祭祀は渙しくなつた。いまこの堂宇には育地蔵、開運十三夜尊、聖徳太子、日蓮上人が共に祀られる。傍らに

春も漸けて調五月と
の芭蕉句碑がある。雄木の仁井田碓籠の高足其日庵有

物の追悼のため誠間桃中らによつて建てられたもの。句碑の前、川越康雄家には県指定重要文化財縁切寺徳川満徳寺文書が保存される。

本陣



境地地区の本陣

上町南側に町指定史蹟本陣がある。門、玄関、屋敷等よく昔の遺構を残し、例幣使御通行の様子を勞働させる。本陣文書および関札数十枚を保存する。本陣のおつねさんという老女は町の移り変りを最もよく知る人で、また一ぱんおそくまで三夜待をやつていた。その頃の三夜待は近所の人たちとコタツにあたりながら御馳走をいただき、やがて東に向つて歩き出す。そうして月が出るところまで歩くわけで、ときには尾島（約四キロ）の近くまで歩いて行つてしまつたという。一二月八日を「事初め」二月八日を「事終い」といい、赤飯と小豆を煮た水で芋、豆腐、大根、人参、牛蒡のノツベ汁をつくつて呑つたそうで、さういふも、芋、人参など大きな天ふらを揚げて近所へ配つた。また、一茶の訪れをうけた専車はこの本陣の人である。

天台宗長光寺

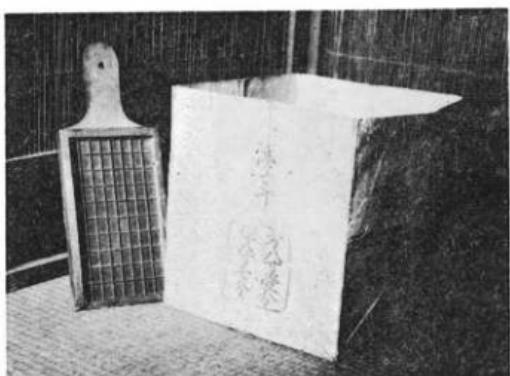
町の南境城趾の地にある。町の人は西の寺という。それは道一つ隔てて、真言宗愛染院があるからで、愛染院は古く大学院といった。さて、長光寺には県指定重要文化財の懸仮があり、また南北朝時代と推定される木彫十一面觀音がある。昨年庫裡裏のやぶを発掘中に建式、觀応等紀年銘板碑九点、断片苔石、多数を発見した。板碑はほぼ一列に倒伏していた。本堂前には鎌倉時代の多宝塔、多層塔があり、また梯形の和時計一台がある。境内に山王様があつて最近までかなり信仰があつたといわれ、小猿約三〇点、湯文字などお礼参りの奉賽物がたくさんある。

有名な蘭方医村上隨憲の墓碑はこの墓域にある。「西に宗祇、東に隨憲」といわれ、沢渡の福田宗祇とともに當時上州蘭方医の双壁と称された。隨憲は埼玉県久下村（現熊谷市）の出生であるが、長崎に留学してシーポルトに師事し、文政二〇年学卒えて来境した。境に種痘を伝え、難病治療の名声が高かつたが、それのみならず征病余暇醫學を開設して子弟に教養を与えた。隨憲の子孫には多くの有為の人物がある。後平は勤皇家として從五位を追贈され、秋水は境小学校創立の功労者、義郎は漢学者であり町長を勤めた人。

上州一円繩張りをもつていて香具簡の巨魁不流三左衛門の墓もここにある。吉沢清溪の撰文によると会盟する門生三百余人という。三左衛門は元禄のころ不流齊という膏薬を大道で売りはじめ、代々三左衛門を名乗つて香具簡の膏薬を業としていたが、明治七年七月三左衛門が没すると不流一家は繩張りを寄居の姓家へゆづった。以来群馬の大通商人の繩張りは寄居一家で支配するようになつた。

乾糞場と純正舎

乾糞場は第一、第二の二ヶ所ある。戦前糞の集散は県内随一といわれ、多く糞商人によって買占められた糞はここで乾糞され、倉庫に積み込まれて糞相場の変動をまつた。いまは全く使用されていない銀行の多くの倉庫もこの乾糞によって常に一杯だったといふ。乾糞場は明治中期



糞買いが持つてあるいた紙糞、左は一分銀をかぞえる銀糞

（境地区）

に糞買渡辺氏が現第二乾糞場を設立、大正八年第一乾糞場が設立されると合併されたもの。糞買が任意で行われたころはいざれも荷車で境の糞買商の店先へ運ばれた。出荷時になると町の大通りは荷車で歩けないほど厭わつたそである。子供はよろこんで荷車の後押しをしてきた。父親が二銭の餓頭を買っててくれたからで、なつかしい餓頭屋はいまも面影を残している。現在は部落単位で製糞会社へ一括出荷され、町の糞商は仲王と呼ぶ肩糞を賣うに過ぎない。店をもたない小さい糞商は上糞期になると袋をもつて村々を買って歩く。昔は糞の売買が何石何斗というように糞で行われ、糞買は紙製の一斗糞をもつていた。このような糞買人は信州方面からも来るが、いずれも生糞で製糞会社へ送られるのと現在の乾糞量は非常によく、第一工場は廃され、第一工場が一ヶ年三回の出荷時期に一週間位ずつ操業するに過ぎない。

純正舎は町の工場説

致政策によつて昭和三七年に東京から進出した脱脂綿工場で、従業員二〇〇人最も有力な事業所の一つである。近時工場は次々に拡張され、大しく農村人口を吸収している。

大字伊与久

字芝崎の雷電神社の前に「壽始の原」という地名があつて、天正のころ五十九（いよく）弾正吉重がはじめてこの地に住し、ここに始めて五穀を蒔いたという伝説がある。五十九氏に從い来た吉沢、高井、宮崎らは伊与久五苗と呼ぶ旧家である。村高七九三石六斗、明治初年の家数人口は

家数 二九五軒

人別 一、二七三人

馬 八八疋

江戸時代伊勢崎藩に属していた。北部の芝崎、西部の馬場、南部の館野からなる大部落で、芝崎一帯は繩文文化遺跡として知られる。部落の西端を柏川が南流し、また芝崎西部に伊与久沼という大沼があつて、水利に恵まれた地で、古くから耕地の三分一を上田として開発するとともに、また麦種、米糀も盛んであった。柏川のほとりには水車が設けられていたが、大正年間高井氏を最後に廃された。高井氏没後水車につかた多數の石臼を組み合せて珍らしい墓碑を建て、松本宏洞がこれに序した。芝崎に旧来女村の名付親石井常翠の句碑「敷島の道案内らし白胡蝶」があり、館野の中居に揚州庵半湖の建てた芭蕉碑「蓬萊に聞ばや伊勢の初たより」がある。半湖は高井氏、明治、大正の俳人としてこの附近に最も重きをなした人で、高井家墓地に、

うござすや老をかくごで山ごもり

の辞世碑が建てられている。常翠、半湖の没後伊与久の俳人は雜俳に走り、いまも老俳家の集団桜吟社がある。

境一伊勢崎街道の道筋は折巾され、さらに近く舗装されるはずで、数年来この地点は面目を一新した。

史蹟五惇堂跡

五惇堂は伊勢崎藩の有力な郷学で、享和三年に宮崎有成らによつて建立されたもので、領主は宇東馬場に百歩の地を与えた。文化五年有成は、さしに師である幕府の儒官柴野邦彦にはかり「夫れ孝は百行の基、子弟を教育するにはまず孝より始めよ」と、これを執政松平信明の賛同を得青木水教に命じて刊誤本によつて石經を模写せしめ、自ら隸額を松平定信に乞うて有成に与えた。有成は感激して江戸で石に刻し、利根川を潮流して運び、五惇堂の前に立てて学徒の教示とした。孝經碑がすなわちここで、現在旧五惇堂の地にある。郷学の建てられてより郷村に遊侠の徒の絶え、就学するものは増したといわれ、江戸の儒者寺門静軒ら有力な学者がここに拠った。



五惇堂跡の孝經碑

（伊与久地区）

安政四年伊与久村の大火によつて類焼し、その後は寺院、民家で学業を行い、明治初年の学制頒布までつづけられた。孝經碑は題額書体共に優秀なものであり、伊勢崎藩の儒者新井雀里の撰した副碑もある。初代県議会議長宮崎有成は有成の子である。

雷電神社

芝崎にあり伝には建保三年赤石（伊勢崎）城主三浦之介義澄が山城国加茂大明神を勧請したといふ。もと南方にあったのを現在の地に移したと口碑にあるが、社殿は古墳上にある。古墳の玄室は立派な石組がそのまま残され、出土品も神官宅に若干保存されている。境内の杉の木の皮を持ち帰り、煎じて呑むと雷災に遭わぬといわれ、また馬の祈願に驗があるという。近くに雷電という古い神官の家があり、駒形の字名もある。六十年毎に大祭があり、張り子の飾りものを部落毎に行う。例祭は一月二十五日、四月二十五日。雷電様の縁日には大風が吹くものとされる。社殿に開流算額一面、氣楽流柔術の奉額がある。ここは伊与久沼の養漁権として年間十五万円の収入があり、お祭りには各字に祭典費を支する境町で最も富有的な神社である。

寿久茂塚

馬場竜昌院裏の丘陵をスクモ塚といふ。古くから古墳として知られ伊勢崎風土記中の発墳暦に記録がある。往昔ここを掘つて異物を得、その形綱壓（オモリ）の如く、或は小管の如く、また庄口（オジメ）の如し、児童之を戯弄としたある。勾玉管玉の類であつたろう。竜昌院の主僧之を掘りて神像を得たと伝えている。

伊与久沼

雷電神社所有で鰐の養殖で有名である。面積一、七九三坪、上沼、下沼、葭沼、新沼に分かれている。上沼下沼は元禄年中伊勢崎藩主酒井忠寛の掘つたもので、新沼は天明三年同忠温の徳を頌して部落のものが増設したという。

大字上渕名

から出土品があり発墳暦にその記録がある。古墳所有者が表土の売却をなしたので、現在採土中でさすがに巨大な古墳の面影も姿を消すであろう。周濠はなおよく痕跡を止めている。数年前はいわ馬脚、馬耳、鳥首等の出土があつたがこれら出土品は地元にない。戦前部落の大半は山林であったが大部分開墾がなされ、早川が部落を北から南へ貫いて流れが水田が少い。江戸時代村高三五五石八斗三升、家数七三軒、人別三三二人、馬四二疋、母衣山、六品山、幾世林、金潤塚、衣服林、大神谷、欠赤垣戸、行人山、長命寺前、比丘尼塚、阿弥陀山、四郎兵沼等の地名がある。

大字東新井

往古は上沼名村に属していたが、江戸時代にいたつて一村をなした。村高二〇九石余伊勢崎領で、この部落は畠より水田が多い。伊勢崎・太田を結ぶ線上には「井」のつく地名がたくさんあるが、いずれも大間々扇状地の下にあつた清水湧出源がこのあたりで頭を出しているので、水利に便である。とくにこの部落は湿地帯に属し、一たび降雨にあると農家の庭先は泥濘と化す。純農村地帯で北部矢ノ原の開墾されたのは最近であり、米作と養蚕および生糞、大根等の生産がある。數十年前まであつた道化芝居是有名で、芝居に使われたカツラ小道具の類は最近まであつた。七母女天は厄神として今も信仰され、実相院と称した寺は廃されたが、御本尊木彫聖観音は今も残され、つぎの台座墨書銘がある。

奉造立觀音尊像一世

圓滿子孫繁昌之所ヲ守護シ給也

天正十七年己酉□□□□□□□前

最も北部に位置する部落で一面古墳地帯である。伊勢崎——太田県道はこの部落を東西に走り、巨大な双子山古墳を割いた。この古墳も古く

実相院跡には大きな百万圓珠数が残されており、例年行つてきた天道念仏は一昨年から廢された。神明社境内の安永四年に建立された抱擁道祖神は境町唯一の異形のものである。

獅子舞

鎮守神明神社に属して古くから行われた。獅子面の様式は江戸初期あるいはその以前のものと推定される典型的重箱獅子である。雄獅子、雌獅子、法眼からなり、火狹流タガガリ一人立連舞形式で、演舞に益前、雌獅子隠し、橋ガガリ等がある。しかし新参の立つ者がなく、近年まで老人、壯年者の行うところであったが、一昨年天道念仏とともに廃されて、以後演舞されることがない。荒井字十郎氏と故清水武平氏は幼年から數十年以上も獅子の伝承につくされた功労者であった。

大字下淵名

古く淵名庄と呼ばれ、部落の東に淵名城跡があり、藤原秀郷の子淵名氏の掲げたところと伝えられている。また東山道はこの地を経たと故老は伝えるが新田駅の明らかなこと、これを証するものはない。東沼を擁し農村地帯にありながら部落に横町、中宿、沢町等の町名があるところからある程度の町並をなしていたと思われる。村高八二二石六斗、伊勢崎藩に属し、田畠相半ばする。部落の東に御手洗大明神があり、古い遺跡であるが旧記に詳かでない。小中学校、公民館、駐在所があり、明治初年の家数人口は

家数
二一一軒

人口
八四〇人

この部落には安政年間向い田（淵名地区の字名）騒動という有名な水喧嘩があった。隣村下流にあたる花香塚へ早川の水をやらなかつたことからはじまり、この出入は江戸評定所の裁決によって淵名側が敗訴したもので、そのときの名主は裁判決着の直後に入牢の疲れから死んだ。

延喜式神名帳に上野国大國神社とあり、上野国神名帳に從一位大國神社とある。すなわち延喜式内上野十一社の一つである。伝説によれば垂仁



古流氣樂道武

（下淵名地区）

天皇九年風雨不順にして大旱がつづき、疫病流行して人畜大半が枯死した。天皇はこれを憂いて諸国の神明に奉幣したとき、十一年九月百濟の車臨をこの地に遣わした。車臨老松の下に宿したとき前の池で白頭翁が手を洗うのをみて、叟何人ぞと問うた。翁は答えて吾は大國主の命なり、君は誰ぞという。われは天皇の勅を奉じて疫病平癒風雨順時奉幣使百濟の車臨なり、願わくは国家の大難を救助し給えと答えると、翁は唯々として言下に姿を消し、たちまち風起り甘雨澎湃として前の池は淵となり、草木は蘇生し疫病息んだという。よってこの地を淵名とし、天皇は車臨を貢して佐位の位を授け、大國主命を今之地に祀った。神護景雲元年從五位上佐位采女勅を奉じて上毛にいたり、今之地に社殿を修造して淵名の莊三十六郷の惣鎮守とした。村の人は「ゴゴノミヤ」と呼んでいる

が、丹波國穴太郷より五郷の宮を配祀神

としてためで、五

郷の神輿に供奉して

きた宮内、大須賀、

生形、石井を淵名四

苗といふ。

現在の社殿は文化

元年淵名の名工弥勒

寺音次郎が奉築した

もので、音次郎は彫

刻の名手として有名

でその結構をよく知

ることが出来る。

神社の宝物として古写

本延喜式全部五十卷、日本名蹟図誌上

野之部四巻があり、境内に石幢一基がある。銘文に曰く

本願主法名清本秀行

延徳二年庚戌四月十六日

龜部に金剛界の四仏種子が刻してある。神社に属する郷土芸能に下瀬名獅子組と氣楽流古武道がある。

妙 真 寺

部落中ほどにある妙真寺はもと尼寺だったという。幼稚園が附属し、境内に室町と推定される石仏一基、および宝匣印塔がある。また瀬名城趾で発見された舟型石棺が埋没してあり、板碑若干、さらに仁井田碓嶺の門人弥勒寺耕映の「われもまたおなじ枕や涅槃像」の句碑がある。

獅 子 舞

流儀は東新井とおなじ大猿流タガガリ一人立連舞型式で、タガガリといふのは国定村の朝ガガリに対する謂である。江戸初期より伝承されたものと推定され、古くは竹籠に獅子頭を納めたそうだが、正徳年間より木箱に保存される。演舞にかしこまり、雌獅子隠し、橋かかりがあり、幼年、青年、老人各層に伝承者を得、毎年十月二十二日の大国神社例祭に奉納される。昭和三十四年十月県代表として靖國神社、明治神宮へ奉納され、その記念額は郷土芸能保存会長須永覚氏によつて大國神社へ奉納された。下瀬名獅子組がよく伝承されているのは長沼孝吉氏の七十年の功勞によるものであろう。

大字木島

この部落はもとずっと北部にあったが次第に伊勢崎境街道沿いに移つて、字新田が村の中心部をなすにいたつた。村高二七四石四斗、伊勢崎藩の支配にあつたが、東部「十八石」と呼ぶ地はもと勢多郡飛び地として、宮郷を支配した跡部氏の領有であった。明治初年家数は九三軒、人



道路工事 中央に伊与久電線の道標

(木島地区)

百々（ドードー）は昔村高九四石八斗、家数一九軒、人別一〇〇人ほどの中村で、東端に郷蔵があり、岡崎、羽鳥姓が多かつた。小村であるから郷蔵寺は無住で、下瀬名妙真寺が兼務する。百々といふ川のせらぎを意味する地名だが、この地区を流れる長溝川は下瀬名に源をなす小川

別三八一人、馬二八疋。中屋敷と称する曲輪が村の上ばん上にあり、ここに字蔵敷があり、昔郷蔵のあつたところで、二間に九尺

ほどの大正のころまであったといふ。

領主の酒屋様も貧乏大名の例にもれず、しきりに領内へ上納金を命じたが、油屋と呼ばれる

る旧名主暮俊英家の上納金記録によると、明和八年から天保十二年までに五三〇両の上納金を行つてゐる。し

かし酒井氏のほんとの貧乏は天保後であるから御一新まで小暮家がどれほど絞り取られたことであろうか。

で、村の南部を流れる世良田用水は慶長十三年に掘り開かれた水流である。経藏寺墓地には境城主小此木長光一族の墓碑があるが、由来を明らかにしない。俠客百々紋次の墓もここにある。花輪越光居士。国定忠次は大前田英五郎の添状によつてこの紋次に預けられ、紋次の繩張りをもらつて貸元になったといわれる。いまこの地区は伊勢崎街道の舗装工事がおわり、住宅団地として町営住宅、工場の建設があり、近く町並の状態になると思われる。

大字上矢島

往古この部落は新田政義の三男谷島信氏の領するところで、徳藏寺の地をその館跡といい伝えている。一面水田に開墾された村で、北方を流れれる早川に水利を得る。やがて利根川に合する早川はまだ小さい流れで部落から北方に広がる大水田地帯を満たすには不充分なので南方長溝川からも水利を得る。文政年間この長溝川の堰堤をめぐって、木島百姓、境を相手に大きな水出入りがあった。いわゆる「四寸口騒動」で、今も故老の語り草になつてゐる。この騒動は長溝川から取り内れる堰の水口の寸法をきめたもので、水口四寸の堰がきまとてあるが、上矢島村で堰の下に別のトンネルをつくつて水を引いたのがわかつて大騒動になつた。水に深い執着をもつて村の成り立つを知ることが出来る。また一畝一歩耕作地を演したくないという村人があるので、トラックや観光バスを貫通する道路を設けることが出来ない。部落が非常な不便を感じながら、その不自由に甘んじてゐる姿も由なしとしない。稻作と養蚕が主で蔬菜類の栽培は比較的少ない。封建性の濃い土地柄だが餘々に近代化のきざしもある、「若妻会」の結成もその一つといえる。それは農家で嫁をもらうのに苦労することもあって若妻の優遇方法を考え、毎月一日づつ慰労の休日を設け、老人や仕事をはなれて心おきなく憩うわけである。

明治中期のころここに三余義塾があつた。徳藏寺住僧南部儀善が開いた漢字塾で、小学校を卒えた有力者の子弟はこの三余義塾が世良田の環水堂へ通つた。明治四十年ごろ儀善が老衰のため、弟子の新井議澄があとを嗣いだが間もなく廃された。田代字平、羽島伊三郎、大館進次郎の諸氏はいまも生存する筆子である。儀善の立派な顕彰碑は大館氏らの盡力によって徳藏寺境内に建てられた。また平坦地には少い小学校分校が最近まであつた。境町合併以前世良田小学校へあまり遠いので設けられ、小学校低学年はここで分校教育を行つた。世良田村が合併問題で紛糾したとき、上矢島部落は熱心に境町合併を望んだが、その最も大きな理由は指呼の間にある境小学校へ児童を通学させたかったからで、分校は境合併とともに廃され、全村境校に通学するようになつた。

德藏寺

新義真言宗で上武士能満寺末、その由緒は永禄五年内裏勤仕北面の武士南修理太夫妻原義頼が肥後の菊地武秀とともに上野にいたり矢島村に住した。義頼の長子を頼広といい土佐守と称した。頼広は深く三宝に帰依し、その発願によつて文禄三年十二月邸内東の方に一寺を創立し珠宝山宝藏院徳藏寺とした。頼広の子出家得度して開山となり猛辯上人と呼んだ。その後南家宗代の香華院となり、一代秀栄上人は宝曆五年四月庫裡を築造した。十七代南部儀善は由緒深い古刹の廢絶を憂えて明治三十四年二月本堂を入母屋造瓦葺根に改めた。また寺社合併のため廃された新義真言宗淨運寺は部落の西端に墓域を残している。足利時代中期の人といわれる秀範上人の開山であるが創建年代を明らかにしない。ここに歌舞伎役者一代目沢田之助の墓碑がある。

上矢島獅子組

神社合併によつて明治末年に廃された鎮守勝手神社に附属する獅子組であったが、いまは徳藏寺に属す。流儀を明らかにしないが東新井、下潤名獅子組と同じ火挿流と推定されるが、前託二者に比して新しく江戸中期の創設であろう。毎年旧暦九月二十九日（クンチ）と十月二十五日

の両度演舞されたが、いま十月十七日の村祭りに徳蔵寺境内で公開演舞される。雄獅子、雌獅子、老獅子（ホーガン）の一人立連舞で、獅子舞の前に祭礼棒がある。祭礼棒には、ゴカ、トウトウ、早絆、三本切、六本通、ゴカの共切、真剣の七種がある。獅子舞の種類に

1 平の舞（一名つぱくらの舞）

2 御やまと免の舞（一名ちんどでしろ）

3 十七の舞（一名かむろの舞）

4 橋ががり

5 雌獅子かくしの舞（一名かくすけの舞）

がある。

東新井、下潤名獅子組には舞の唄がなくなつたが、上矢島にはよく伝えられている。唄は獅子の舞方によつて異なり次のとおりである。

一、やまから山に離れて里に出てこれの御庭で羽をやすめそ

一、参り來てこれの御庭をながむれば黄金小菊でお庭輝く

一、この寺にあるべきものはけさころも御経文箱（ふばこ）にからか

ねの島店

一、この寺は飛騨のたくみの建てた寺くさび一つで四方しめしめ

一、この寺は東大門中ぞりで高野まさりに建てた寺

一、ここはどこよと人間えはこは都の車橋くるりくるりと廻るうき

橋

一、鎮守さま氏子揃えて花遊び花も氏子も見てわからぬ

一、かくすけがかくよかくよとかきくれて我らのささらはめりよう細かに

このほか雌獅子かくしの舞にはつぎの唄がはいる。

一、雌獅子雄獅子がかくれても

一、雌獅子雄獅子がかたをならべて

一、雌獅子雄獅子の出合が面白い

一、松にからまるつたの葉も年が明ければほろりほつとはぐれた

上矢島獅子組も新参に立つたものがなく、現在の演舞者はほとんど六

十才以上の老人ばかりであるし、とくに笛吹きは老年の羽鳥岩藏氏一人でその伝承が心配される。

御嶽教荏原講

御嶽教荏原講は埼玉県深谷在に発祥し、文政年間上矢島村に流布された。木曾御嶽の山岳信仰で講社は第一部より第三部まであって第一第二は埼玉県にあり、上矢島の結社は第三部に属する。第三部の代表者は藤村喜一氏、さらに派生したものに新田町上中、伊勢崎市馬見塚に講社がある。村の講員は約六十人で毎月の御嶽日は九、十八、二十七の三日、この日講員が参会して無病無災家内安全の説話をする。

御嶽教の行は主として水行で、入寒から寒明けまで寒中三十日の水行をする。いま水行をするものは五人で、毎日夕食後集まり、寒水をかぶり沐浴潔済の後神前で戒経を誦詠し、自らの息災を願うとともに行者としての修行陶冶を期す。その行は非常にきびしく寒中肉、魚、ねぎを食うことを禁じ、女の肌にふれるのを許さない。境町に数多くの御嶽教講社があるが、荏原講ほど修行録をするものではなく、活発な布教活動をなすものもない。江戸時代後期から熱心な行者を数多くあげたがこれらの人によつて明治末年木曾の大滝に碑がなされ、大正四年、同八年に先覚大月勇吉、藤村市太郎の記念碑が村の鎮守跡に建てられている。

大字西今井

新田氏の一族今井氏がここに拠つたと伝えられ、その館跡遺構をよく止めている。元文三年の「今井村様子書上帖」（茂木吉一家所蔵）によつてみると村高一四六石余、反別二八町余、田畠半分づつで田方は大部分上中田である。この部落は早川が貫流るので水利に恵まれ、むしろ湿地帯に属する。家数一七軒、人数八六人にすぎない。旗本池田新兵衛領である。いまも二十数軒の純農村地帯で、稻作養蚕を主とし、蔬菜類の栽培はほとんどない。したがつて夏の繁忙に比して冬は完全な農閑

期である。元文の書上帖には「稼に男は農業の間十月時分二月下旬まで笠懸野にて代銀出し薪に仕度仕事、女は取納の間にもめん買調へて売布稼少々宛仕候、其外何にも女の嫁無御座候」とあって、男は一〇キロほど北方の笠懸野へ薪作りに出掛けた、町へ売り出すものである。農間女の稼に糸引き、織物、真綿など行うことは、境周辺農村の例で、古くから糸、織物の盛んであったことがわかる。いま機織りをする家はほとんどなく、男女とも農閑期は工場勤めをする。

四隅の水田地帯は、いま大半を村外からの入作とする。稻作に適するこの地は多く南と畠地帯の農村が自らの販米を得るために入作するためで、四キロ位の遠村から毎日農耕に来る人たちも少くない。早川閑跡に「喧嘩田」があり、また「サカサ田」「厄病烟」などの地名がある。喧嘩田は水喧嘩のあつたところという。サカサ田は常に水の干ることがなく、秋の落水期にもサカサに水が入って来る、また厄病烟は古墳上の古い首切場であったと故老はい。ともに忌田烟の謂いであるが、數年前村の道普請のとき厄病烟から採土することになり、村外にある地主は田に成ることを欲し、快諾して済めの酒までおくつ。道普請のはじまつたその夜、厄病烟の採土に最も強く反対した村人が急死したので村中仰天し、採土は中止してしまもそのままにある。因果応報に恐れをいたずら思想は封建的な部落に強く残つて、忌病烟に手をつけたのを嫌う。境からの道路はこの部落でさえぎられて北方へ貫通しない。前述した上矢島村内に反対者のあるため、西今井部落の経済農耕上致命的な損失である。家庭工場が一ヶ所あるが、商店は一軒もない。

今井維義館趾

新田族今井氏の分家維義の館趾と伝えられるのは現茂木吉一邸で、総廻り一六〇〇メートル、南北五六〇メートル、東西三〇〇メートル、周塀を設け嚴然一郭を成している。茂木邸内広い裏山の雜木林は百鳥狐狸の巣でいまもいたちなどが走り廻っている。田畠はあまり見かけなくなつた蛇はこの雜木林へ無数に潜り込んでいて、白昼茂木氏の屋内

を横行するそうで、大きい青大将など決して人を恐れない。それでも「トラバサミ」をもっていたらを捕獲して歩く商売人も最近はあまり見かけない。

維義は今井維氏の三男でここに住して今井五郎といった。その子清義は新田義貞に従つて鎌倉攻めに戦功があり、義貞が越前に戦死後は出家して乗蓮といった。

日蓮宗妙見寺

もと慈光院という寺があり觀世音菩薩を御本尊としたが、天明年中頃焼した後ついに再建することが出来なかつた。その寺跡は名主某が私欲をはかり売却して一部の地を残すだけで、いまに觀音免という土地が所々にある。明治十五年越後茂木吉五郎がはかり堂宇を再建し、池上本門寺

貫主新居日蓮上人みづ

から開基となり上栗山妙見寺と名付けた。境

町に日蓮宗寺院はこの

一寺だけである。毎年

十月十三日御会式は村

中によつて盛んに催さ

れ、婦人子供まで總出

て映画会益踊り等を行つてゐる。この寺の東

は早川堰の水淵によつて隔てられたが、住

職ら相はかり數年間を

要してこの水面を埋立て、児童遊園地を設けた。今井館趾に属する



妙見寺のお会式

(西今井地区)

寒行は住職や日蓮宗徒によつてつけられている。ときどき附近一帯か
ら板碑の出土がある。

大字三ツ木

仁安三年長榮寺文書に「みつき」の地名がある。よほど古くから集落
があつたと思われ、さらに部落南方に櫛文時代遺跡がある。早川は西今井
を経て三ツ木を貫流するあたりでようやく川幅が広くなる。原始民族の
生活もこの流れを利用したであらうし、鎌倉時代に至つては水田農耕が
あつた。境町に属する村落のうちでも比較的早くから集落のあつたとこ
ろである。戦国時代には金山城主由良氏の部将根岸肥後守がここに拠つ
た。寛文年中村高は二四六石余、七割が天領で、ほかに高山、門奈の一
旗本が分領していた。はじめ三絆地であったが後に四絆入会となつた。
明治初年群馬県新田郡から一時檜木県に編入され、同九年ふたび群馬
県に編入された。もと連合戸長役場、三ツ木小学校もこの部落にあつた。
むかしの部落は北方にある旧福荷社附近にあつたといわれるが、次第に
現在の例幣使街道沿いに移転した。街道は部落の西から曲りくねつて早
川に出るが、自動車が通るのに困難であり、早川の木橋は毎年崩れ落ち
てしまつた状態なので一昨年コンクリート橋に架替となり、現在道路の直
線化と拡幅が行われている。また数年前から県土木事業として早川の拡
幅改良工事が続けられている。

農業は稻作と養蚕が主で、蔬菜の栽培は比較的少い。家畜の兼業農家
も次第にみられ、早川辺りの酪農もあるが、とくに小黒三郎氏が經營す
る養豚は百頭近く、境町において最大の規模をもつてゐる。二、三年
来養豚の経営は非常に不安定で、境町では數頭の飼育が大部分で、小黒
氏のようになつて年間八十万円の赤字を出しながら百頭の養豚を続けて
きたのは異例である。

眞福寺

部落の西北端にあって、上武士能満寺末寺現在無住で上矢島庵藏寺が
兼帶する。根岸肥後守がその姉永寿尼の冥福を祈るために建立したもので、
はじめ永寿山真福寺のちに自在山と山号を改めた。肥後守没後永寿尼の
傍らに葬り、いま立派な五輪塔一基が寺堂の傍らに存している。文政十

二年一月本堂の建立があつたが、このときの建築の後見を下潤名の名工
弥勒寺音次郎が行つた。次いで昭和三年春本堂庫裡が荒れ果て、北側
の薦養屋根は崩れ落ちたので阿久沢藏蔵氏らが奔走改築の議が起り、三
十数軒の檀徒によつて、南向の古堂を廃し現在の本堂が東向に新築され
た。寺に残される肥後守位牌銘「真福寺殿繁善栄大禪定門、慶長三成
年十月廿五日」真福寺千手觀音は佐渡新田三十三番札所のうち第二十
九番で、「二二二三ツ木の里にきて見れば木草の露は□となるらん」の
唄がある。

真福寺墓地に俠客三ツ木の文蔵墓碑がある。文蔵は国定忠次の子分で
三ツ木村の生れ、いま例幣使街道のかたわらに文蔵屋敷と呼ぶ地があつ
て、母と妹三人暮しだったという。文蔵が長するにおよんで母が没し、
妹おやすは上中の清蔵の女房になつて明治まで存生した。この清蔵も忠
次の子分で大戸の関所破りのとき忠次と行を共にした。文蔵は手裏剣の
名人だったが境町の桐屋という居酒屋で島村伊三郎に叩きのめされた
のを恨み、天保五年忠次らと八人で伊三郎を闇討ちにした。その後文蔵
は八州さまの手によつて世良田村で召捕られたが、天保七年三月二十八
日とも八年ともいわれ諸書まちまちで、また刑死日も明らかでない。文
蔵墓に「三明通達居士、俗名大見山文蔵、天保十一庚子年六月廿九日、
行年三十二才、施主やす」と刻されている。天保十一年は文蔵刑死三年
忌ではないかと思われる。なお文蔵、忠次ら処刑のもの國定一家の繩張
りは一部を神海の丹次がついで八十郎一家とし、大部分を上田中村の沢
吉がついで田中一家とした。國定一家即田中一家で、安政五年沢吉召捕
りのあとその子の敵がつぎ、さらには藤、庄といで戦後にいたり、庄の
死後跡目をつぐものがあつてなお田中一家は境町にある。

三ツ木城址

天正年中由良氏の部将根岸肥後守繁道がここに拠ったと伝えられ、真福寺の地をその館跡とし、土塁空濠よく遺構をとどめている。金山軍記に、惣軍六手に分散攻撃する事、一方は西谷五郎、横瀬左近を大将として金谷因幡、高山遠江、同美作、小此木左衛門尉、同和泉、根岸肥後守、三河、坂庭守監、村越中を先として二百余騎、弓鉄砲相調て三木川を前に当て高尾台陣を取り扱る也」とある。元龜天正のころ三ツ木附近で数度の戦争があつて敵味方の戦死者が少くなかつたという。村の東にある臨濟宗香林寺はその戦死者を弔つたと伝える。

肥後守の跡は生涯寡婦で老年におよんで三ツ木城の側に草庵を構えてここに卒し、法名を永寿尼とした。弟肥後守は庵室を一寺とし真福寺と号したのである。由良氏没落のち肥後守は岩鼻に移り没後、永寿尼の傍らに葬つた。最近まで由良園繁の感状があつた。

感 状

昨一日不只敵寄来之処金山加勢不及武士三木両城之勢以早速追払
味分人勢不損之段神妙之至令感入候弥々可抽忠信者依如件

二 月

根岸 三河 守殿
根岸 肥後守殿

国 繫 判

城趾のうち字堀の内があつてここを俗に牢屋敷と呼び、側に牢屋敷地蔵がある。部落の北方西今井村境の厄病煙は肥屋守の首切場といわれる。首切場と城趾間に貴先堀、城趾真北に堂前、自光坊、城趾の東香林寺の地に竈灯廻の地名がある。

大字女塚

古くは「おうなつか」とい、鎌倉時代に女塚の地名が散見される。



綿縫機（女塚地区）

歯車がねじれている

女塚の集落はもと東方の玄海と呼ぶ地にあつたが、例幣使街道が通するにおよんで漸次西に移転した。地名女塚の由来を明らかにしないが、元屋敷の一帯が古墳地帯であり、三ツ木地区に接する北部は櫛文時代遺跡であり、西部に属する地に土師住居跡がある。江戸時代半分が旗本領、半分が天領であったが一時隣村境村の領主だった林肥後守領となつたこともある。少しの水田地帯を除き村の中心部はゆるやかな丘陵をなし、畑作地帯が大部分である。部落の北を貫流する佐波新田用水はやがて早川を越して尾島町世良田に至る。この水流を古くは世良田御神領用水といい、はじめは新せき堀といつた。しかし女塚の農業用水は一部発動機で汲み上げて給水するほかは大部分長溝川用水を繋いでひいて利用する。養蚕、稲作、蔬菜等盛んであるが、町並に近いため、住宅団地となり、住宅、工場の進出が多く、毎年數十戸の増加がある。とくに部落に連なるゆるい丘陵は農耕に適せず県道沿線にがあるので、数年に農耕地はみられないなろう。部落西に一大住宅団地があり、境町駅に比較的便利なため、ますます住宅の建設は盛んである。

この住宅団地は古墳と土師住居跡群より成る。古墳地帯よりはかって

元享銘板碑等の出土もあり、住居跡よりは多数の遺物の出土発見がある。昭和三十六年秋群馬大学調査団は五日間にわたりて住居跡の発掘調査を行い、土前期聖穴住居跡の発見確認と、多数の出土品を得た。もと世良田郷に属し、八坂神社氏子で大祭には年々山車を引き出し、その祭難子は優秀でいまもよく伝承されている。明治のころここに人形松と呼ぶ男があり、操り人形の名手であったが転出してその家はない。開口義信家に、一頭の獅子頭を伝えるが非常に古い重い獅子であるが伝承が明らかでない。同家に伝える縄繩台は原始的生産過程を知る貴重な資料である。

薬師鉱泉

部落東方に玄海と呼ぶ地があり、東端を流れる早川との間に沼沢の遺跡がある。薬師鉱泉はこの沼跡の西畔にあたり、古くより靈泉があったことを思われる。字湯殿の地にありかたわらに薬師仏の石像を安置するより泉名が起つたのである。源頼朝が那須野へ狩した帰途この靈泉を浴びたと伝説される。いつごろから泉があったか明らかでないが、この南に法華寺跡があり、こより文保二年六月銘の石碑を発見した。法華寺の草創も古く、靈泉の所在地を玄海といい、古沼沢の遺跡等よりしてかなり古く発見された泉である。例幣使街道よりの入口に鉱泉道の道標があり、天保弘化のころ浴槽を設けて盛んに浴客を招き、国定忠次も度々來遊したという。その後一旦廃絶したが、明治三十一年ごろ村民共同經營によつて再興したが間もなく止み、昭和九年現当主小林氏が良榮館と名付けて鉱泉浴場を行つてより、規模宜しく四隣幽遂の仙境に遊ぶもの多く盛んとなつた。鉱泉は胃腸病、痔疾、神經痛、皮膚病、リウマチ、眼病等に特効ありといふ。

法楽寺

古くは部落東方字玄海にあつたが、いま北方佐波新田用水畔にある。真義真言宗藥王山東光院法楽寺、無住にして上矢島德藏寺の兼帶となつてゐる。安永年間毛呂梅藏曰「女塚の法楽寺は懸持寺の寺中東光院」とす。

慶安二年に寺号を改め今地に移す。元は高橋の西、道の北に屋敷あり、今其時の住持源海といふ人の墳あり、夫故高橋の西、道の北の島を源海といふ。境内に先住の石塔五基あり、内一基に「湯殿一世之行人源海、元和元年十一月廿九日」と刻す。しかし「玄海」の遺物はさらには古い。本堂の床下に二基の宝冠印塔基座が残されている。一基は貞和二年丙戌九月時正中日に勧進沙門円性が建立したものだが、もう一基には次の銘文がある。

井比丘尼

了心

大檀那沙弥

道心

本願沙門
延文元年申七月白日

玄海

つままり延文元年に玄海が建立したもので、南北朝時代この地に寺があつたであろう。ここに「キトギーサマ」と呼ぶ一堂字がある。法印重英の廟所で、重英は正徳享保ころの住職、常に四方に巡錫して衆人の疾病災難に悩むものあれば、加持祈福を施して直ちに災厄を去らしめた。よつて世人祈福坊と呼んだが老年痔疾に苦しんで卒したといふ。毎日五月十三日は農繁期にあたるので旧暦八月十三日を忌日とし、村中によつていまに祭祀が続けられており、とくに痔疾の願掛けに御利益があるといわれる。

祈福坊の堂宇の傍に「泉」の古碑を存す。もと薬師鉱泉の地にあったものを移したのである。また境内に珍らしい狂歌碑一基がある。

をみなしなまめけばこそあひけうも
こぼるときつゆをもづらめ

屋職 堅丸

そもそも堅丸とは何者ぞ、文化八年刊狂歌画像作者部類によれば「堅丸号千首櫻浜松氏清七住神田」とし、生没年を明らかにしない。當時境町

には同じ五側の狂歌作者藤立吉、井斎少智があるが女塚の作者を知らない。いわんや江戸の堅九が女塚にいかなる関係を有したであろう。あえて思惟するならば近江の重厚の弟子で当時この地にあった有力なる俳人津久井山行に交があったのか。

大字 栄町

この部落はもと世良田村と一村であったが、文禄三年女塚村へ分郷になり、寛永十六年八月女塚に別れて南女塚と呼び、その後境村と改めた。元禄二年旗本津軽伊織の知行所となり、同年また天領となった。文政九年十一月上総国林肥後守領地となつて明治にいたった。新田郡境村は明治二十一年字東町地区が分村して境町に合し、さらに昭和三十一年境村本村も境町に合併し栄町と改めた。例幣使街道は旧境村中央で北行して女塚にいたる。狭く曲りくねつた例幣使街道と、これも羊腸たる江戸街道が南方平河河岸へ走るだけでみると、道路がなかつたが、明治以後急速に道路の開発がなされ、部落は一変した。部落の東方の「七本辻」と呼ぶ地は近ごろまで七路の合したところだが、行方の知れぬ細い野道が幾筋もあつた。七本辻のすぐ西に二枚橋があつて大きな青石が二枚架してあつた。故老のいうところによると、女塚古墳石棺の蓋石を利用してしたものという。緑泥片岩の長さ一五センチ、横八〇センチ、俗に青石と呼ぶこの石には次の刻字があつた。「上毛新田境村字武松橋、世話人岡口伴吉武申、嘉慶辛巳六月吉日」この石橋は後にコンクリートに架け替えられたが青石は最近文字を削りとられ、東小学校庭に合併記念碑として建てられている。

この地を「ハチコ一」と呼ぶのが多い。昔八戸よりなかつたといわれ、この八軒を旧家としているが、もと八戸のあつたのは部落の東南方の一角で、集落は次第に西に移つて現在に至つたという。村高二六八石余、文化十年の家数六九軒、人数三三九人、この部落には忘れる事の

出来ない大火があつた。天保八年正月二十八日、境町から出火し、折から西風にあふられてたちまち境村へ燃え移り、百姓店舗四九軒、一社一寺一堂、合せて一二〇棟を類焼した。実際に村中の大部分を焼き払つて隣村高岡村まで延焼した。

法義寺もこのとき全焼して再建したものであるが、梵鐘は戦時中供出し、戦後淨財を募つて再鋳した。境内に博徒田中一家二代目田中敬次郎の碑がある。敬次郎は上田中村の人新井姓であるが、田中一家をついで田中と称した。また七地蔵、観音堂がある。

清泉堂と頼海寄進手洗鉢

清泉堂は幕末に吉見俊庵の開いた寺子屋で、いまの第二乾画場東方にあつた。俊庵は天明六年上総國に生れた人であるが、出家して堯獻と号し、武州金讚寺の住職となつた。この地に来たのは万延元年で、晩年を寺子屋清泉堂の師匠で終え、長光寺に葬つて、「受菩薩戒規連院堯獻」とした。筆子に上武士森熊の父富蔵、中沢広勝等の俊才があつた。頼海は俊庵の弟子で觀山千日の回峰山を行い、大行滿と号した。古今二十數人に過ぎない大行を満じた一人であり、また名利川寺住職として、赫々たる威勢があつたが、勤皇の事あつて幕府に追われた。頼海は師の俊庵が失意のうちに境村にあるのを聞き、文久二年千里駕を飛ばせて師に再会した。師を深く存問するとともに二年後に清泉堂の近くの秋葉神社に手洗鉢を寄進した。その銘文に曰う

「尊勝社宝前大願成就 元治元年甲子十一月望、施主森村富蔵、小山左衛門、大行滿頼海」

秋葉社を廃したのち頼海寄進手洗鉢は稻荷社境内に移された。傍に芭蕉句碑がある。

大字 北米岡

北米岡地区はそのむかし高岡村といつた。一帯にゆるい丘にあるから



普使われた花火の筒

(北米岡地区)

で、丘の南の方は急流にのぞみ旧利根川の遺跡である。岡と水流、原始民族の生活し易い条件をもつこの地は古くから人類の生活の跡が残されてゐる。加えて利根の水流は交通の便があったと思われる。しかし村の成り立ちは比較的おそいようで、もと女塚村に属して村高の外におかれただ。そして「タカホカ」と呼ばれたが、一村をなしてから高い岡の地にあるところから高岡村とした。明治五年八木沼部落、高岡部落を合せ、米岡とし、南北に分けて北米岡とし、昭和三二年境町に合併した。明治三年家数は百姓三四軒、借家一二軒、合せて四七軒、二社一寺一堂である。が今日一社一寺一堂を廃す。

農業は養蚕が主力で、次いで蔬菜が多い。水田が全然ないので大部分の農家が飯米を得るために遠くへ出作している。あるいは四キロ、五キロを経た水田地帯まで耕作に出作に出てゐるわけで、機動力のないころは牛車をひき往復三時間余りを要してと稲作に精出した。

部落の東方熊野神社は南米岡地区と共に祭祀を行なう氏神で古墳上におかれ、境内に神社合併の由来を記した記念碑が建てられている。部落の東半分の地を新屋敷と呼ぶ。東方世良田村の界をなす早川はこの地区を利するところがない。東小学校と門徒宗弘教寺が

ある。また大正の初めまで境附近で盛んに行なわれた花火筒三本が金井重明家に残されている。大きいものは長さ三、三メートル、直径〇、五五メートルもあり、この花火をつくるのに古文書がたくさん使われた。

縄文時代住居跡

東小学校の周辺一帯が縄文時代晩期の住居跡として古くから知られ、出土品の多いことで夙に学界の注目される地である。昭和一六年国学院大學神社精神文化研究所大場博士を団長とする発掘をはじめ、ついで第一次発掘、戦後伊勢崎高女、桐商、境中学校、境町地方史研究会、さらに伊女においてそれ／＼発掘調査とその報告がなされた。国学院では祭祀遺跡を、そのほかのグループでは住居跡の調査を行なったものである。国の大場博士を団長とする発掘は大正六年字本郷で見つかり、なお多數の出土品は附近の金井好造家によく保存されている。

大字南米岡

南米岡は明治初年北米岡とともに一村をなしていたが古くは八木沼村といつた。仁安三年長楽寺文書に「やきぬま」、尊氏安堵状等に八木沼の地名が出てくる。村の北西方に一沼があり、畔に柳樹のあるところから柳沼一やきぬまといったと故老はいう。明治まで沼があつたがいまは遺構を伝えるのみ。江戸時代初め天領だったが、後旗本領となる。広瀬、利根の兩川は常にこの部落を洗つた。さらに史前において広瀬川氾濫原をなす土地柄、出水の禍はあった地味肥沃で蘇菜の栽培に適する煙地帯で、農業は養蚕、蔬菜、酪農が多い。稻作は自家飯米を北方水田地帯へ出作している。蔬菜で最も盛んなのは蕪、莧、ねぎで、次に早生トマト、キュウリ、牛蒡等である。この地区より南部、西部へかけては肥沃な畑地帯であり、蔬菜の盛んに行なわれるところから若者の工場勤めや難村が割合少く、そして勤勉である。

飯山碑

文化文政の俳人千里軒一魚の碑で、千里軒と呼ばれた旧金井一魚邸内にある。一魚は通称李右衛門、八木沼里正であるが、早くから粟庵似鳩の門に入り、その高足として名をはせた。旧家豪農財を誇った一魚の邸里軒は結構美を尽し、故に千里の道を訪ねて来たといふ。一魚とは村の沼中の一匹の魚になぞらえたといわれ、千里軒一魚をもつて号とした。邸内飯山碑には、伊勢崎藩家老閑睡峠の次の題贊がある。

段山碑

段今飯山、王父脩之、先考耕照、修身保之
甘棠所慕、藝叢攸吟、侯石侯斯、期神照臨

文政七歳甲申仲春

そして裏面に一魚の句がある。

龜の尾に白髪くらべむ春の風

七十歳翁一魚

一魚は天保十一年二月十七日没した。金井家墓地にある一魚墓碑に辞

世が刻まれている。

散る花も人もこゝらがよかるべし

大字平塚

この地区は利根川畔にあり、広瀬川の合流する地点である。大部分の集落は川北岸にあり、一部南岸にあって埼玉県境に接する。両部落の連絡は往昔渡舟をもつてし、明治にいたる舟橋が架せられ、昭和に上武

大橋が完成した。仁安三年「かみひらつか、しもひらつか」の地名があり、江戸時代天領で安永八年家数一二七軒、人数五三七人。

大字島村

平塚は上州より江戸にいたる河津の中心で、江戸時代舟の出入で賑つた。河岸問屋七軒、いまも北清、京屋などの名を残す家があり、川畔に荷蔵も昔のまゝにあってなつかしい風景である。この土手から見る広瀬合流点、上流はるかに秩父連山が浮び、西にいろいろとられた平塚村は名画

にも比すべきである。

商業は少く大部分農業を営む。養蚕蔬菜の栽培が主であり、最近酪農も盛んになりつゝあって、利根の堤防は乳牛の放畜場として利用される。近時養蚕より蔬菜に転ずる農家が多く、地味肥沃であらゆる野菜類の栽培に適する。従つて夏冬通じて野菜の収穫が続けられる。若者は勤勉であり、工場勤めをするものは少い。北部水田地帯の人はこれら野菜地帯へ嫁にくるのを嫌う。それは水田地帯は冬の農閑期をゆっくり休むが、野菜地帯では冬野菜を手いっぱいに張り込む。現金収入に魅力があるからであり、農業の多角化を期するからであつて、これに酪農を加えて生活の安定を図っている。

利根の堤防外もよく耕作され、またこゝから夏期鮎舟が出る。投網で鮎を獲り舟中これを料理するもので、絶好の納涼場として盛んである。

馬頭観世音塔

もと堤防外にあつたが西光寺境内に移されている。塔身の高さ一・七メートル、幅一・六六メートル四角、正面の銘刻「馬頭観世音菩薩」は江戸の詩仏老人の書で天保七年八月に建立された。側面の鉛木広川の撰文によつて当時平塚の駄馬の状態がよく窺われる。下河岸にくに馬子が多かったといわれ、毎日入津する河岸荷はこれらの馬背で上州の八方へ送られた。馬子は命より大事な馬の無事を祈り、またつまづきころび、怪我や病馬を慰めるために、建てたもので、かゝる立派な塔は県内稀に見るものである。

大字島村

島村とはもと利根の洲中にあつた前島の謂であったが、明治四三年河川改修を機に洲中より両岸に移転してむかしの前島は利根の河中に没した。いま島村は新地、新野、新田、立作、北向、西島、前河原の小字から成る。利根の両岸に点在する村々である。古くは朝日の里の一集落

であったが後島村として独立し、江戸時代旗本領として明治にいたつた。境町において最も文化水準の高い部落である。昔は舟運、養蚕、蚕種を業としたが、いま蚕種の製造量が最も大きく、次で蔬菜、養蚕、酪農が盛んで、耕作は飯米に足らない。したがって村の経済を左右するのは島村蚕種組合であり、次ぎに野菜相場である。野菜は蓮蓬草が最も多く、ねぎ、午夢、山芋、なす、胡瓜、ビーマン、それにアスパラガス等西洋野菜の作付も漸次増えようある。蚕種の本場だけに蚕糸をはずしたということはほとんどない。

明治初年に教会の設立があつて、長い間境町附近において唯一のものであり牧師と多数のクリスチヤンがいる。老人若者を通じて勤勉であり高度の学識水準をもつ。思想はいずれも近代的合理主義であつて、とにかく若者に進取の気風が強い。明治二十年頃すでに乳牛の導入があり、牛乳の販売が行われているが、酪農に最も適する利根の草原と村人の進取の風を思えば決して故なしとしない。新地の長谷川牧場は、約二十頭の乳牛を飼育し、現在境町において最も大規模で、この地方は大部分雪印の集乳園にある。

鎮守諏訪神社は北岸字北向にあり、小・中学校、公民館は南岸字新地にある。南岸地区は数年前簡易水道の敷設があり、ほとんど全戸口がこれを利用する。水道敷設は政府の簡易保険賃貸をもつて行われた。

今回の民俗調査に当つてはこの島村地区を除外した。それは非常な文化村であり、進取の気風に富む村人はいち早く信仰的習慣的行事を捨て去つたからで、部落のどこにも江戸時代の面影はみることが出来ない。「跡平さんが桜」といわれた利根川堤の桜並木もとうの昔に姿を消した。そしてこの頃桜並木のなかに柳家という料理屋があつて主人の吉松は鉢取り得意とした。利根の鮎も島村あたりが砂小石の河原で絶好の産卵地だったが、鮎の瀬附しがだんだん少なくなつていて、それは洪水によつて川床が荒れることと、さらに盛んな砂利採取に原因するといわれる。採取された砂利はトラックとトロッコによつて多く東京方面に運

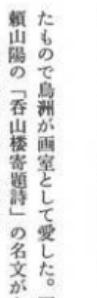
ばれる

金井鳥洲墓と 春山樓



(島村新野地区)

板倉



板倉

(島村新野地区)

板倉

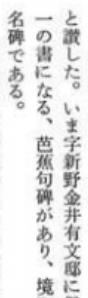
金井家墓地は字新地にあるが、こゝには鳥洲（うじう）のほか父の俳人華竹庵万戸、兄の詩人沙邨、弟の画家研香等、上洲文化史上に名を残した人々の墓碑がならぶ。ことに鳥洲は画業に生涯を費し勤王の事蹟も多く、山陽、小竹、星巣らと親交があつた。

香山楼

香山楼

戸が利根の洲中に築いたもので島洲が幽室として愛した。四隅の山々を一望に收むる景勝で、頬山陽の「香山楼寄題詩」の名文がある。島洲の師春湖は

南湖



南湖

と讀した。いま字新野金井有文邸に保存される。香山楼の傍らに酒井抱一の書になる、芭蕉句碑があり、境町にある五基の芭蕉碑中最も優れた名碑である。

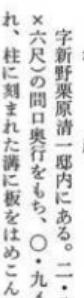


芭蕉

降らずとも竹植ゆる日はみのと笠



芭蕉



芭蕉

字新野栗原清一邸内にある。二・八メートル×一・八メートル（九尺×六尺）の間口奥行をもち、〇・九メートル（三尺）の間隔に柱が立てられ、柱に刻まれた溝に板をはめこんで壁としたもので、四方このはめ込

み式板壁をもって造られている。床は地上より〇・三メートルほど上げられ柱をもつて支える。主として穀類を原石のまゝ保管するために造られたもので、原石を入れては板壁をはめ込んでゆき、約一・八メートルほどの高さで蓋がなされる。その上に屋根があつて、瓦屋根になるが旧は竹屋根だったという。中の壁板に天明二年の建立墨書きがある。有名な浅間大噴火の前年で、この辺でも三〇センチ位の降砂があつて、作物皆無の状態だったからこの穀蔵は露命をつなぐ貴重なものであつたろう。

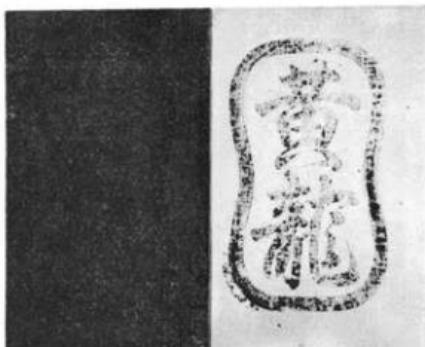
県営島村渡舟場

渡舟場は北岸の字北向から新地をつなぐ路線上にある。従来村営であったのを昭和二六年四月一日、この渡舟場を通過する境一岡部線の道路が県道になると渡舟場も県営になった。冬期は朝七時半から夕五時半まで、夏は朝七時から夕七時までの間渡舟客が一人でもあれば舟を出す。

客は小中学校へ通う学童が大部分で、冬は一日に二〇〇人前後、夏は釣客や農事の手伝い等の往来があるので二百数十人位の利用者がある。渡舟地点の川巾は渇水期で一三〇メートル、増水期に入ると二〇〇メートル以上になる。島村にも竿舟のペララン舟頭は少なく、現在は横張力雄、藤野三郎氏がいる。両氏が休む場合には宇前河原梶塚某といふ年寄りを代りに頼む。島村にも練達した舟頭はこの三人以外いない。上流に上仁手渡舟があつて朝夕学童の往来だけを扱う。これは埼玉県分であり、下流に尾島町分二つ小屋渡しがある。現在では上流のダムで水流を調節するので殆んど舟止めはない。

島村蚕種組合

江戸時代各家で行つてはいた蚕種の製造販売を明治初年に勧業会社を設立して統合した。しかし蚕種の個人営業は依然つゝけられて昭和に至つた。二十数年前その合理化をはかるために大同団結した島村蚕種組合が生まれ、こゝに蚕種の個人営業はまったくなくなつた。古い歴史と環境に恵まれた島村蚕種は毎年好成績を収めて今日に至つている。



蚕種紙の刷込み
木版（島村新地）

大字中島

利根と広瀬兩川に囲繞された島であるところから地名を生じたといふ。また南北時代中島氏の落人説もあるが前者が正しい。中島氏は洲中の島に土着すると世をしのんで柿沼を称した。柿沼修理大夫を草わけとする。延文年間卒去の墓碑が北向地蔵のかたわらに残されているが、この墓碑は後年建てられたものであろう。修理太夫は現柿沼一二家の祖である。

江戸時代村高一五六石余、家数六二軒、人数二六六人、全村畠地である。大古小此木村とともに広瀬川氾濫原の中心地であるから地肥沃である。大古小此木村とともに広瀬川氾濫原の中心地であるから地肥沃である。野菜栽培に適し、養蚕とともに最大の収入源となつてゐる。野菜類は蓬

蓬草、ねぎ、牛蒡が多く、白菜、きやべつ、にんじん類も盛んである。

中島河岸の舟運の盛んな頃は舟頭、馬子が多く、大力大食で有名な部落であり、現在村の指導者には比較的老年者が多く、古い仕事よりはよく守られており、また葬送時間は厳守することは境町隨一である。

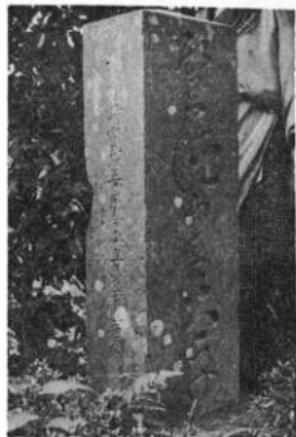
大字小此木

利根・広瀬両川の間にあり境町隨一の肥沃の地である。とくに桑園、

根菜類がとれることは黒土層が深いからで、掘っても赤土に達しない。牛蒡などは一メートルから一・五メートル位太く真っすぐ伸びた優秀なものがとれる。堀込林太郎氏と石原時太氏は蚕糸量と牛蒡で農林大臣賞を得た。

朝日の里と呼んだころはわずかな人家であつたろう。江戸の初めにも十数軒にすぎない集落であったが、農民の移転土着は盛んで、江戸時代末期には家数一五五軒、人數六九八人の大村になつた。伊勢崎藩の領有するところであった。

村中道路は未開発で狭く曲りくねっている。商業は少なく大部分農業



聖徳太子碑
(小此木地区)



地獄図 十六幅の内
(小此木地区)

る。佐波新田三十三番觀音靈場の一つ、十六大地獄および和時計を保存する。夢想楽「黄組の葉」は古くから知られる。

小此木長光館跡
境城主小此木長光の拠ったところと伝えられ、福寿院の東南方二百歩の地にある。いまこゝに長光夫妻供養塔を存し、無住阿弥陀堂がある。かつてこの堂宇で太子像を発見し、この部落が菩提治職の盛んだったこ

で、次いで機業が盛んである。農業の經營規模もいわゆる大地主は少なく、一〇アール(一町)前後の自作農家が多い。それは蔬菜の二毛作を行ない、人手不足のため農繁期の労力雇傭が不可能で自家労力によるからである。稻作は飯米分だけ出作し、四キロの遠方の水田まで農耕に出掛けた。近年は「オカタシボ」とよぶ畑地を水田化した稻作を行うようになった。いずれも水利がないので、発動機によつて井戸の揚水が行われる。昔盛んだたた蚕種業者は少ない。

眞言宗福壽院

もと部落西端にあつたが江戸時代中ごろ現在の地に移つたといわれるが明らかでない。しかし境内に鎌倉時代五輪塔、応永銅宝匣印塔等がある。

とを思はせる。なお長光の子孫といい小此木姓を名乗る旧家がある。

大字下武士

古くは竹石とした。下武士から上武士へかけて一帯の起伏が続き、県内でも有数の古墳地帯である。百基を越す古墳は旧のまゝ保存されるものは一基もなく、全部盗掘された。大正年間にほとんど手が入ってしまつたのである。江戸時代旗本領四給入会地で、例幣使街道が通じていたが、その旧街道はそのまま道筋を残している。幾条かの幹線道路の裏側にある村中の道は障壁七曲りと呼ばれるよう細く曲りくねった道がわずかに自転車の通行を許す。

一部の水田を除いては大部分桑園と畑地で、したがつて養蚕を主とし、蔬菜、稻作がこれに次ぐ。村の指導者は老年層が多く、農事、施策ともこれらの人によつて左右される。小、中学校、公民館、農業協同組合があり、旧開志村の中心地であった。

城山百庚申

部落の西方に城山と呼ぶ旧根岸三河守城跡があるが、この城山の麓から頂きにいたるまで三、四〇センチメートルほどの自然石に庚申の銘刻をして百基建てならべた。その年代は明らかでないが境町に百本の百庚申はこの城山のみである。小此木地区には一基に「百庚申」三百庚申」平塚西光寺境内に「千百度詣り」の庚申塔があるが、見事に並列した庚申塔群はこゝ以外にないわけである。近ごろ紛失がはなはだしく既に數基を残すのみ。

大字上武士

佐波新田用水が部落北方を貫流するが、水田の開かれたのは明治にいたつてからで古くは稻作が非常に少なく、ほとんど麦と粟を主食としていた。「米の生る木をまだ見ない」と唄われた頃の悲惨な状態を思ひう

かべると、一帯古墳群で原野の多かつたことがわかる。農業は養蚕、稻作を主とし蔬菜の栽培が比較的少ないので兼業農家、あるいは若者の工場勤めなどが多い。また戦前まで機械の盛んな地として知られたが、戦後廃業者が多く機業者は少ない。

下武士地区吉野熊次郎氏とともに、この部落の池田勝司氏は開志民謡保存会の長老で、桑摘唄、赤碗節は明治のころからこゝに伝わつて伝承される。

四寺星數(よんじやしき)

部落中央武士神社周辺一帯を四寺星數と呼ばれるが、神社をこゝに移す前まで四つの寺庵があつたといわれる。行人塚もこゝにあるといわれるが所在を確認し得ない。こゝに武士神社が移転したのは明治四一年で、境内に御嶽教の記念碑数基がある。下武士地区とともに御嶽教信仰は盛んである。

大字保泉

往昔穗積親王の統べ給う地とし、その陵墓ありといふが明らかでない。天正年間穗積を保泉とし江戸時代松平、新見、杉山氏の三給地、村高三六二石余。

保泉のさざんか

字宮前一四七星野茂氏の所有地にある。県内最大のもので昭和二七年一月一日県指定天然記念物に指定された。

鈴木広川墓

広川は安永九年に生まれた。通称四九郎、源文園と号した。幼時より学を好み田園の往来にも書をはなさなかつた。博覽強記、独学よく諸家の説を涉獵し、遂に一家見を立てた。源文園詩集その他の著がある。天保九年五十九才で没し鈴木家墓地に葬る。墓碑は寺門静門の撰文するところである。

衣・食・住

衣服

はじめに

衣服関係の資料は非常にすくなく、わずかに木島と伊勢久の資料のみであった。ここに示したものは伊勢久の真下孝三郎氏よりの聞書きを中心としたもので、若干の木島での採集をふくめてある。

ここに示した資料のみについてみた場合、とくに目立ったものというものは見当らない。しかし、境町が伊勢崎とならんでの機場であった関係上から、機おり関係の資料に若干おもしろいものがあった。はたおりで身上をのこしたはなしは、まだ新しいことなのでかなりはつきりと伝承されているし、めちやばたとか、きりすねなどもはたばにふさわしい例だとおもう。

ほかに、祝儀関係や子供の着物に関する資料についても注意してみたが、短時日の調査であつたのでまとまつた資料がえられなかつた、これ以外に染色関係の資料もえられなかつたが後日を期したい。

服飾

はれ着は祝儀、不祝儀に着るもの。嫁にくくるときとか、成人式をむかえるときなどにつくる。よそいきは、一見に行くときなどに着る。お客様もんともいう。ちよいちよい着はちょっと外出するときに着るもの、ふだん着よりはすこしいもの。

ふだん着は家にいるときなどのきもの。

仕事着は野良着ともいう。

嫁に来るときには、上から下まで一通りの着物をもつてきた。いいきものははたんすに入れて、わるいもの（ふだん着など）はつどらにいれてもつて来た。嫁のなかには自分の着物がなくなると、里へ行つて着物をせびつて来たという者もあった。

祝儀の仕度はもらい方で一切つくってやつた。村でいい家では着物は七枚、中辺で五枚、ふつうの家で三枚程度用意してきた。最近では貸衣装を利用する者が多く、つくる人はほとんどないようである。

むかし、袖のついた夜具とかふとんを、長持に入れてもつて来たのはいい家で、貧乏人の場合にはふとんとか、ふだん着をすこしばかりもつて来ただけであった。

嫁が嫁に着物をつくってくれた機会は生きぼんであった。生きぼんについては年中行事の項に報告があるので省略するが、このときには婚家の姑は必ず嫁にいいきものをつくってやつた。嫁はこの着物を着て（あるいはもつて）里へお客様を行つた。これはどここの家でもしたことである。

なお、ここではせちいしょうはつくつてやらなかつたようである。境町地方では、大正の中頃はたおりがさかんであった。この辺は伊勢崎とならんでの機場であり、はたおりで身上をのこした家もあつたほどである。この頃、小麦一俵が五円、米が十二円ぐらいであったが、はたお一疋で小麦一俵より高く売れた。ちんがらといって簡単なはたでも一疋五円で売れた。大島だと十円になつた。一疋のはたを、早い人は二日

ぐらいでおりあげた。

はたおりのさかんな頃のはなしだが、ある家で母親がよこいとかえし、くだまき、かけい、かけをしておき、むすめが一人で、一ヶ月に十二とか十三ものはたを織つたという。この家では、はたで身上をのこしたので、はた紙の祝いをして、親戚をよんだという。境町では貨機は明治のはじめころからおつていた。境内市がたつたので、そこへもって行つて売つた。

網糸は、ひいたり、へたり、織つたりした。がらまで自分の家でつくつた。網糸は明治の十年ごろまでは、この辺でもつくつていた。

自分の家で着る着物のことはきようという。これは、家で糸をひいたり、くす糸を買ってきて、自分の家で織つてつくつた。貨機のあまり糸を且念にあつてもつくつた。各村に、むかしはこうや（染物屋）があつたので、そこへもって行つてそめてもらつた。現在でも、多少のきようは、網とかウールをつかつてつくつてある。

自分の家でちりめんをおつたこともあった。糸はよりやでよつてもらつた。これは明治のはじめのころのことである。はれ着などは境と伊勢崎へ買つて行った。

珍しいはたもおつた。めちやばたといいうのがある。これは色々な糸をつかつておつたもので、そのため、柄にも、しまにもならないようないはたであった。きりすねといいうのもあつた。これは、たいていがおりきれないで残つたのを、且念につなぎあわせておりあげたもので、ふだんきをつくつた。

つぎに子供の成長と着物との関係についてみる。うぶ着はくれ方でつくて贈つてくれた。お七夜にはしゃぎをつくつた。近所の人や親戚（血縁の比較的遠い人）は、お産見舞としてお七夜までにそれを贈つてくれた。ふつうで一大ぐらいい。血縁の近い人はすぐ使えるものをもつてきた。たとえば、ジャケツ、帽子、着物など。

「こおびは七つまでつけているのがふつうだが、むかしは、小学校の二、三年まではつけていた。七つのときにはおびときの祝いをした。この日赤飯（おこわ）をふかして祝つた。

ひとつみは四つぐらいまで着ていた。

ほんだちは一人前になつて着るものだが、体の大きさに応じて調節した。背ぬいをぬいこめば小さくなり、巾いっぽいにすれば大きくなつた。

十五、六才までは筒袖をきていた。年期奉公にけば、二十才ぐらいまでは筒袖をきていた。なお野良着は筒袖である。

こしあげは一二、三才までしていた。

ふんどしは十五、六才からした（六尺ふんどしをした）。女は腰巻を十三、四才からつけた。うたに、「十三ばかり毛がはいた、じいさん、ばあさん」といとくれば、あかねのふんどし買つとくれ、といいうのがある。うわっぱりとしては、明治の頃は男女ともケットをきた。これには赤と黒とがあった。

そのあと、女的人はかたかけをするようになった。

かぶりものとしては手拭がふつうで、ほつかぶりにした。

野良仕事をするとき、さびいときにはもうろくずきんをかぶつた。

今から五、六十年ほど前に、子供は学校へ行くときに、おこそをかぶつて行つた。わかいむすめは、よそへちょっと行くときにはやはりおこそをかぶつた。わかいものはむらさきいろのものをよくつかつた。おこそは、とうらりめんとかメリヤスでできていた。

はきものは下駄がふつうであつた。よそへ出かけるときはぞうり下駄をはいた。下駄を買ったのは正月とか盆のときであった。お正月には足駄をはいた、女衆はあとばといいうのをはいた。これははきよかつたとう。そのあと、だんだんにあづま下駄になつた。

仕事用のはきものとしては、地下足袋がはやる前には、女衆が足袋の

うらに布をあててとじたのをはいて、その上にわらじをはいた。わらじは男衆が夜なべ仕事につくつたもの。大正の末頃から地下足袋をはくようになり、わらじも足袋も腰を消した。わらぞうりとか竹の皮ぞうりは、伊勢崎の下茂呂の方から売りに来たので、この辺ではあまりつくらなかつた。

手袋はおや指と他の指とを入れるところが別の形のものをはめた。これは山へ行くときなどにはめたもので、ふだんはあまりはめなかつた。（昭和のはじめごろまでのこと）。そのため、あかぎれがよくできた。田舎の店にはあかぎれこうやくがよくさがつていたものだ。

雨具にはみのとがざがあった。みのはけだいともいい、買つたり家でわらでつくつたりした。明治の頃までは家でつくつたが、その後買つたのが多くなつた。ござは買った。これには、たてござとよこござとがあり、たてござは旅のときなどにつかい、よこござは田植や田草とりのときなどにつかつた。野良にかかる帽子としてはすげがさがあつた。これは買つたものだが、そのあと大正の末ごろから麦わらぼうしをつかうようになった。

食 制

はじめに

食事の習慣は日常のものと晴日のものとに分かれるが、ここでは主として日常の食事について述べ、年中行事その他の行事関係の食事については、それぞれの項にも記しておいたので参照されたい。

この地方は平坦地で比較的水田に恵まれた農村地帯であるが、以前は食料として麦の占める割合が多かつたことは、他の県下一般の風と同様である。とくに夕食はうどん（冬はニボウトウ）を常食にする習慣は共通したものであろう。

間食のコジハシを食べる家は半数ぐらいといわれて少なく感じられる

が、食料が今のように豊富でなかつたことを物語るものも知れない。家によつて作れない食用作物が多く、不自由しながらもしいて作るうとなかつたのは、何かかくれた信仰による一族の伝承があつたものであつう。作れなくとも食べることは必ずしも禁じられてはいなかつたので、近所からもらつて食べ、そのかわりの物を返したり、後の機会に返したりして、一種の贈答の習慣さえ生じてゐるようである。

食 習

主 食 料

1 伊与久

昔はひき割り麦（大麦）と米をまぜて主食にしていたが、七・三ぐらいいの割合で麦の方が多かつた。ひきわりをまぜたので、ヒキヤリメシといつた。今では米が多くなり、ふつう米八の麦（つぶしむぎ）二ぐらいいの割合でまぜてある。

麦はもとからよく取れたが、米は上水が引けてから確実に取れるようになつた。

アワも前には作り、アワ飯やアワ餅にしてうまかつた。現在はアワ・ヒエ・キビなど作らないといつていい。

2 木 島

むかし（戦争前）は麦が四に米が六程度はいい家の食事で、農家ではハシメシといって、米・麦を半々ぐらいまぜてたべた。大体は麦六に米四ぐらいいの割合であった。

これは數十年前のはなしだが、ある大忌に番頭が来て、食事のときには、あつた、あつたといつて箸をもちあげたといふ。なにがあつたかと聞くと、めしの中に米があつたというのではさみあげたのだといふ。その家ではそと一割といつて、麦が一斗に対して米一升をまぜたものを常食

にしていたという。

こんな風だから、むかしはどちらをたべる日がちよいちよいあつた。祝いの日には米のめしをしたのである。(木島)

一日の食事

一日三回、朝はん、おひる、夕はんという。耕作地が近いので、食事は家に帰って取る。しかし芝崎などでは、昼食のことを「お弁当にする」などと言うのは注意したい資料である。

午前

の十時休みはお茶ぐらいで何も食べない。

アメでもしゃぶればいい

方である。

午後のコジョウハン(コジョハン)は食べる家と食べない家とが、大体半分半分の割合である。食べる家では春の彼岸から秋の彼岸までとなつたりする。田植えのコジョハンは必ず食べる。

田畑に運んで行つたり、近くの場合には家に上がりつて食つたりする。田植えのコジョハンは必ず食べる。

食 品

ふだんの食事

御飯はふつう米八に麦一ぐらゐの割でたく。

うどんは夕食に食べるが、もとは手打ちで、粉一升に塩一つかみを入れ、木や瀬戸物のこね鉢でこね、メン板の上にのせてメン棒のとして、切つてゆだた。

冬季はニボウトウといつて、うどんを汁の中に煮こんだ。「夏のニボウトウは犬も食わない」という。戦後はうどんがふえた。

朝飯と昼飯は御飯、夕飯はうどん(メンコ)が多い。

コジョハン(間食)には、ジャガイモ・サツマイモをふかして食べた

り、ジリヤキ・ヤキモチなどを。ジリヤキはうどん粉をやらかくこねて、ほうろくの上にたらして焼いた物で、砂糖じょうゆなどつけで食べる。ヤキモチはうどん粉を固くこねて、中に御飯を少しまぜたり、アズキあんを入れたりして、ほうろくで焼くか、今までゆでるかする。近ごろは、パン・牛乳なども使われる。

ムギバナモチといって、大麦を石臼でひいた時に出た粉に小麦粉を二対一ぐらゐの割合でまぜてこね、アズキあんを入れて丸めて焼いた物を以前は作った。固くて年寄りなどには食えないものだった。

甘酒をかいて、正月ごろから蚕豆きまで飲んでいる家もある。モチ米三升にコウジ三升入れてねって、かめに入れておくとよくできる。神社に供える家もある。

代 用 食

戦争中は供出がきびしくて農家でも米が不足したので、ミミ草の中に米を入れておかゆにした。草の中に米粒がまじっているので「ホタル飯」と呼んだ。やせる人が多かった。

これはむかしからいわれていることばで、むかし生活に困った時に、野菜ばかり多くて、ところどころに米があるようなめしをたべたといふ。

(伊与久)

わ ら も ち

むかしききんのときにはわらもちをたべたという。これは穀らない稻(わるいもぢ米)を、こまかくくだいてついてたべたもの。これははな

しとしてきていることである。(伊与久)

ほたるめし 明治の中頃の大ききんのときに、ほたるめしといふことがあったとさう。ここのはなしではなく、よそのはなしだが、これは野菜をうんとしいれて、その中に米がたっている程度のものであったといふ。

(木島)

オナメミソは「土用オナメ」「土用ガキ」といつて、七月の盆が過ぎ

たころ、小麦のコウジを自分の家で作って、大麦をふかしてかきこんで作つた。

ふつうのミソは作らない。

ショウヌは組で共同して自家用を作つてゐる。南米岡ではもと二十五軒くらいしほつていて、今は十軒くらいになつた。小此木では三軒共同してショウヌをしほつてゐる。

味噌はむかしから各家でつくつていて、ここ一、三年は買つていゐる。つくつていていた頃は、三年味噌をたべるのがふつうであつた。明治の頃には、汁をつくるのに、おとし味噌がふつうであつた。うどんの汁をつくるときには、みそしをつかつてこしてつくつた。お振舞のときには、味噌をすりばちですつて、それを布でこしてつくつた。

明治の頃は、醤油をつかうのは、農家ではぜいたくとされており、醤油を多くつかうようになつたのは大正の頃からである。醤油が沢山つかわれるようになつたので、昭和のはじめ頃に、伊与久の二区では自家醤油組合をつくつた。

今から五六十年前まではつけにも醤油をかけて食べるとぜいたくだといわれた。(伊与久)

1 伊与久

正月の三日には、うどんえんぎ、いもえんぎ(ぞうにの中にも入れる)ぞうにえんきなどがあるが、ここではうどんえんぎが一番多いようである。

一月四日にはおそなえもんだけをさげて、これを焼いてたべた。この日は縁の年始日で、大判もを三枚(米をもつて行くところもある)をもつていく。この日をナベカリともい、泊つてくると、なべがわれるのである。

一月七日は七草の日で、七草がゆをしてたべた。かゆの中に七草とし

てなずなを入れた。

一月十五日の朝、小豆がゆをした。これをふいてたべると田植に風がふくといった。

一月十八日には、十八がゆといって、おかざりを全部とつてかゆをしあが、今ではふつうの白めしをしている。

一月二十日は、正月えびすこうといった。夜てんぶらをした。

一月二十五日は雷電様のおまつりの日であり、伊与久の年始日であった。この日は赤飯をした。

二月の初午の日にはごめのもち(こもち)をついてまゆだまをつくつた。

三月三日の節供には、もちとすしをつくつた。

三月十五日は梅若といい、以前は赤飯をした家もあった。

三月の彼岸にはぼたもちをした。

三月二十五日は雷電神社の春まつりで、草もちやふつうのもちをついた。

四月八日には、こもちは草もち(よもぎの葉をつきこんだ)をついた。

五月はじめの八十八夜のときには、シモツサゲとか、シモツブタといつて必ずもち(こもち)をついた。

五月五日の男の節供には赤飯をした。

九十九夜の日にはとくにきまつてはいなかつたが、こもちはついたりした。

六月には春菴のやすみ祝いと、かいこ祝いというのをした。

やすみ祝いは、菴のやすみのうち適当な時をみて一回ほどもち(いいもち)をついたり、すしをつくつたりして祝つた。

菴が上漿したときとか、出荷したあとに(日がらは一定していない)もち(いいもち)をついて祝つた。これはほとんど境全体でしている。

これらの場合には、嫁に半日ほどひまを出して実家へもちをもたせてやつた。

七月一日はカマノクチアケで、むかしはコワリモチをついた。コワリ

というには、ひきわりのつぶのこまかいもののことである。

七夕にはむかしはうでまんじゅう（小麦粉を水でこねてまるめ、なかにあんをいれてゆでたもの）をした。今はふかしまんじゅうをしてい

る。

盆は、境町では地区によつて日がらがちがつていて、四回になつてい

る。七月十三日からのところ、二十三日からのところ、八月十三日から

のところ、九月三日からのところにわかれている。

盆にはぼたもちをするのがふつうである。「盆のぼたもちは嫁としゆう」とが仲よくなる」といわれている。これは、盆のころにはたべものが

いたみやすいので、ふだんは仲のわる嫁姑が、ぼたもちがくさるともつたといないので、姑が娘にそれくえ、やれくえといってぼたもちくわせる

ことをいつてているもの。

盆のあと、伊勢久の三区では、七晩灯籠という行事があるが、このとき一日ぐらいいかわりものをこしらえている。

七月二十五日は雷電様の夏まつりだが、二十五、六日と二日仕事を休んで、雷電様のまつりと疊休みをこみにしている。この日は、うでまんじゅうをするものときまつっているが、赤飯をする家もあるようだ。

八月一日は八朔で、この日は赤飯をする。客でもくればうどんをした。二百十日には赤飯からうでまんじゅうをした。二百二十日にはべつにかわりものはしなかつた。

秋の彼岸にもぼたもちをする。

十五夜にはふかしまんじゅうをする。

十三夜にもふかしまんじゅうをする。

十月十五日は雷電神社の秋まつりで、赤飯をする。

十日夜にはもちをつくる。これは夫婦もちといって、二うすづくのがふつう。一うすしかつかない場合には二つにわけた。

えびすこうは大概十一月のうちにあるが、このときは、正月のえびすこうのときと同じに、てんぢりをする。ほかに米の飯をする。

十一月のおわりか十二月のはじめに、秋あげをするが、このときにはぼたもちをつくった。もちをつく家もある。これを嫁にもたせて里帰りをさせた。

十一月にツジウダング（こごめのだんごをつくった）かびたりもち、油もちなどをついたが、最近はあまりやつてしないようである。

冬至にはこんにゃくと、とうなすを食べるのがふつうである。

暮にすはらいをするが、食べものは別にきまつてはいない。

十二月の末にせちもちをつくる。

2 木 島

小豆がゆを食べた日 一月十五日、カマノフタアケ（この日にはやきもちをやいた）。

赤飯をした日 五月五日、八朔。

ぼたもちをした日 春秋の彼岸、秋あげ。

ふかしまんじゅうをした日 十五夜、十三夜。

もちをついた日はつぎの通り。

あぶら祝い（十一月十五日あぶらもちをついた）。

せちもち（十二月三十日ついた）。

小正月（一月十四日、おかざりかえをした。まだまをつくった）。

初午（むかしはまえだまをつくった）。

三月の節供（ひしもちをつくった）。

八十八夜（五月一日あたり）。

蚕ゆわい（春蚕のときだけもちをついて祝った。これはまゆを出荷し

てからついた。また、妻が休むことにもちをついた、これをやすみもちといった)。

川びたりもち、十一月一日、川におそなえをしんぜに行つた。これは

子供が川へ行つてけがをしないようにとの意味。

祝儀、不祝儀のときの食事 祝儀のときには、ながくつながるというのでうどんをふるまつた。葬式のときには、ごはんがふつうで、めん類は、長くつながるというので忌んだ。

食制 一般

上武士は昔はヒエが常食だった。他の部落から「風呂で浮くだらう」と冷かされた
(上武士)

食事

保泉、武士は、あわがら育ち、米のなる木はしりやすえめと昔はいわれた。一升めしといつても、米は二三合で、米の多く入っているのを食うのは、大工・巡査で、ダイクサンマンマ・カシクサンマンマといつて笑しがつた。
(保泉)

きびとあわ

あわは武士、保泉あたりでつくつた。だから、武士や保泉の人たちアワガラソダチといって、ばかりにされた、これは子供がけんかをしたときにいつたことばである。木島ではすこしかづくらなかつた。富貴の家でものづきにつくつた程度である。
(木島)

おひき 寒くぐりで何にも食わねえ時がいい。湯がいて、醤油でからからと煮つける。焼いても食う。肉がでかいからうまい。

(東新井)

カタメン

これはいもをいれたイモメシ、さつまいもをいれたサツマメシなど、ひといろかふたいろいれてつくつた。年に何回も食べなかつたが、米のくいのばしのためのものであつた。

五目メン

ときにはしたが、とくに五日メシをつくるというきまつた日はなかつた。

ツメツコ

小麦粉を水でとかしたもの汁の中に入れてつくつた。これは飯ののこうたときには不足の場合につくつた。
(伊与久)

こじゅうはん こじゅうはんはたべのこさないようとした。たべのこすと、娘が嫁に行けないのでこのことについて、こじゅうはんにもって行ったものは全部たべた。「みんなたべちゃつてくれ、むすめが残ると困るから」といつた。これは今でもいつている。
(上矢島)

べんとう

伊与久では昼食のことをべんとうという。星食時などに、おべんとうを食わねえなどというのは、この辺では伊与久ぐらいである。

うどん

祝儀の際には、縁が長くつながるようにと、うどんを出すのが例になつている(伊与久)。

大食のことをオオグライ、小食のことをシヨウシヨクという。

むかしは、箱膳をつかつていたが、今はチャブダイをつかつてあるのがふつう。
(木島)

食制関係の俗信

田植のときのこじょはんは残すなという。むすめがのこるという。

ねくと牛になる。

物を食べたあとあくびをすると猫になる、背のびをしても同様。

猫が居なくなつたとき、猫の茶わんを福荷様にもつていてかぶせておくとかえつてくるという。

・飯や汁をよそとき、かまやなべの底の音をさせるな。

・ぐしもちをやいてたべると火事になるという。

・小正月のかゆをあいてたべると、田植に風がふくという。

・こわめしに汁をかけてたべると、結婚式に雨がふるという。(伊与久)

住居

住居に関しては別稿に矢島氏の、主として構造の面から報告があるの
で、ここでは民俗関係資料をまとめてみた。資料採集の地域が一部分な
ので、あるいはこの地区での一般的な傾向はとらえられていないかもし
れない。



中島の民家

竜柱

家を建てる時には鬼門除けに竜柱を立てた。季節によつて春は乾(いぬい—西北)夏は艮(うしとら—東北)秋は坤(ひつじさる—西南)冬は巽(たつみ—東南)の方向に立てたが、今は略して立てない場合が多い。

竜柱には女神を祭るために女の使う道具——くし、こ
うがい、かもじ、べに、お
さなどをいわいつけ、扇を

広げて付けておく。これは昔、大工の棟梁が殿様の家を建てた時に材木
を切りそなへて短く切つたので、責任をとつて腹切りせねばならず思
案にくれていた。その時おかみさんがこういうものを作つたらといつ
て、枠組(ますぐみ)を組んで教えたので、無事に家を建てることがで

きた。しかし、おかみさんが教えたことがわかるといけないと思った大
工はおかみさんを殺してしまった。そこでおかみさんの靈を祭るために、女の道具を竜柱にいわいつけることにしたといわれる。これらの品
は祝い物だから、すんでからもいたがる人がいる。

棟梁送り

建前(棟上げ)の日には、棟梁が酒三升を用意して仕事師にふるま
い、祝い金も込んで渡してやる。帰りには米一俵をおさごにもらい、荷
車に棟梁が乗つて仕事師が引いて木やり(歌)を歌いながら家まで送つ
て来るしきたりになつてゐる。

屋根ふき

かましいことをタサゲタ・ケタ・ジマワリとい。ジマワリは古いこ
とばだという。数十年前まではカヤぶきもあつて、山へカヤ刈りの助つ人に出た

ことがある。カヤぶき屋根をクズ屋と呼び、カヤをふく時にはサスは木
の本の方を上にして組んだ。カヤぶきソック(全部カヤを使う)ならほ
とんど手入れはいらないし、百年ぐらいは長持ちする。しかし今では費
用が瓦屋根の二倍もかかる。

麦わら屋根は、材料の麦わらが昔のようによく干してないのであまり
長持ちしない。昔は「物置がなければ小麦は作るな」といわれ、麦を刈
つてよく干上げてからナサオトシでたたいて脱穀したので、麦わらはよ
く乾いていた。今では、麦わら屋根をふく時に、天気が良ければ五、六
年、天気の悪い時にふいたものなら三、四年しか持たない。
ちよつとした小屋などは、トバをふくといって、イネわらやマコモな
どで屋根をふいた。

板屋根をふくのには、クリやスギのササ板をのせた。昔は板割り職人
がいて、ササ板を専門に作つた。ササ板は釘でとめたり、針金じめにし
たりして、石置き屋根にはしなかつた。「板屋をもらうのは借金をもら
うようなものだ」といわれるくらいで、あの手入れに手がかかるた。

最近は瓦屋根がふえてきたが「瓦千年、手入れ毎年」というように、手入れをよくすれば長く持つことができる。

フキゴモリ

昔はクズ屋根がふきあがると、軒端を切りそろえないうちにフキゴモリガユ、またはワタリガユというアズキガユを五升がまでたいて、祝いに来るにはだれにでも碗に盛ってふるまつた。

今も瓦屋根の場合でもフキゴモリには手伝つた人に酒ぐらいは出す。

ある家が建つた時に、ワタリガユをかまに入れて持つて行く途中で細谷の石塔につまづいて転がり、かまを割つてしまつた人がいたが、その家は新築後まもなく火事になつてもえてしまつたことがある。

ワタマシ

家が完成すると古い家から引っ越しをするので、お祝いする。近所やとなり組を呼んでふるまうが、女衆にはお茶呼び程度のことをする。呼ばれた者はマッヂなど持つて行く。

生業

はじめに

保泉（ほづみ）武士（たけし）は栗がら育ち

米のなる木はわしゃ知らぬ

と、この地方の桑つみ唄に唄われるよう、境町を折半して、およそ東

武鉄道伊勢崎線以南、部落では、保泉、上（下）武士以南、小此木、中島、米岡、平塚、利根川をはさんだ旧島村の地域は、全くの畑作地帯であった。水利に恵まれなかつたからである。

ごく最近になつて陸田が経営され出すまでは、穀物栽培としては、栗、きび、稗などの雜穀作よりはかなかつたのであり、それが常食となつたのはもちろんであつた。その食物がひどかつたことは、その一部が次項の労働の項にも出てくる。

しかしこの砂質の壤土は、桑の生育には最も適した。とくに旧島村の土地が、しばし利根川の洪水に見舞われた結果、土壤中に微粒子病の病原菌を保たず、そのために蚕種に向く蚕飼育が可能であつたと、當地の専門家に聞いたことがある。ともかくもこの地帯は、本県における蚕の本場であり、蚕種地帯でもある。だがかりな養蚕が行なわれ、そのため、人々の造りも立派であり、「新地、島村屋造りはよいが」と桑つみ唄にも謳われる所以である。そしてまた、明治初年に、単身、蚕種を持ってイタリアに渡った田島弥平翁の出身地でもあつたのである。

一方、東武伊勢崎線以北は米作地帯とみることができる。が、そちらの報告は、詳しくはない。

そこで、以下 1、農業 2、養蚕 3、機械 4、藍玉 5、職人の村 6、災害に分類する。

1 農業 これは水田地帯の報告しかなく、しかも上矢島の農事曆のみである。しかしこの中で、成木責め、節分の日の豊凶い等注目してもよく、稻を櫛干しにするのも、本県では、この地域から新田郡西部にかけての比較的小範囲だけかと思う。

2 養蚕 この生業が比較的新しいせいでもあるう、変遷が目まぐるしい故でもある。民俗としての面白さはほとんどなく、むしろこれは民俗以外だ。しかしその中にあってコダマサマの信仰は、さすがに蚕の本場だけのことはある。県内一般に蚕をオコサマ・オカイコサマなど敬語を使うが、それは神格視しているからであり、それがわかるのがこのコダマサマであり、蚕糸の食物は、蚕糸の一隅に供えてからでなければ食べないという動作を伴つている。そしてまた蚕糸を折ることも盛んであり、村内にも信仰篤い浅間様もあつたのである。

3 機械 この地方はまた伊勢崎市に近く、その貢仕事として機械りが非常に盛んであって、この地方では、女子は、ほとんど年間を通してこの作業に当り、それからの収入も多かつたのである。その中につて、本文中の小林いちさんは、現在までイザリバタを織り続けており、昭和三十八年、境町の人間文化財に指定された。

4 藍玉 藍作りは多くはなかつた。比較的特殊な例と見てよからう。しかしこれも埼玉県地方にも少く、他にも少からず栽培されたのか知れない。

5 職人の村 本文中の説明で十分。
6 災害 桑は霜害に侵され易いので、その記憶も鮮やかなのである。利根川の洪水は板倉町ほどではないが、その板倉町のミヅカに近い工作の跡が認められるのである。

1 農業—農事暦

一月六日 くわだて

一月十一日 くらびらき

一月十四日 この日、まゆ玉とアーボ・ヒーボをつくった。桑の根をとつてきて、それにかざつた。

一月十五日 小正月、かゆかき棒をつくる。にわとこを一尺二、三寸ぐらいいきつて、その先を四つわりにし、わったところにまゆだまをはさんで、おかゆの中に入れてかきまわし、それを半紙にくるんで、苗間になたてた。また、この日はなり木せめといつた。おしめのよたれべえをとって果物の木にしばりつけた。果物が沢山なるようにとの意味である。

正月うちは、二十日正月頃までは仕事をしなかつた。わら仕事として俵あみをした程度であった。

二月の節分のとき、うらないをした。節分の晩、豆を十二コ（うるう年には十三コ）いろいろの中へ一月から順にならべてやいて、それはね具合で各月の豊凶をうらなつた。けむりが出れば風、けむりも出ないでこげたときは晴、豆から水が出てじゅくじゅくしていれば雨、というきまりであった。

初午 まゆ玉をつくる。これはかいこがあたるようにとの意味。

二月の仕事は麦ふみ程度。

三月にはさくきりがはじまる。じやがいもの植付は三月中。この辺では被粧がすれば陽気があたたかくなつて、種子まきがはじまる。

社日のは日には小泉の社日様へおまいりに行くものもある。ここで百姓道を買ってきた。この日はとくべつのごちそうはなかつた。

四月の仕事は、麦の土入れ、さくたてなど。月の末になれば苗代をした。里いもは四月八日前後にうえる。

五月になると田植の支度をした。

豆類は八十八夜前後にまけといった。八十八夜の前の晩に、霜つぶたといって、やきもちをした場合もあった。今はもちをついて神棚にあげる程度。霜の害は桑にとくにひどかつた。八十八夜のわかれ霜といった。

五月は蚕糞が主。春糞は五月五日前後にはきたてる。苗代の手入れもした。また、はだけの大麦などの間に小豆とか大豆をまいた。

六月は田植の時期である。また、麦のかりいれをする。麦のこなしかたもはじまるが、これは余穂手のまわった家である。

ふつうは、七夕あたりまでに田植をする、うえなおしは田植のあと四、五日たつてからした。

辰の日と半夏には田植をしない。半夏さんはものぐさもので、田へ半分はたけへ半分足をつこんで死んだといふ。

田の草とり（たなぐさとり）は三回した。最近は除草剤をまいている。ひえぬきはたなぐさとりでのこつたものをとつた。

キヤベツのまきつけと桑の追肥は八月十日頃までにする、八月中にはたけの桑むしりをした。八月のなかばから末までに、結球葉の苗床がはじまる。九月になると秋菜などの野菜類などのじきまきをする。

出穂みずは稻の穗がでてから、稻がここむまでかけた。出穂みずは、

種がみゆるようだにたやさぬようにした。そのために水まわりをした。田圃の種は水まわりの足音をききたいといつてゐるといふ。

稻田の水をおとしたときけえがりをした。これは秋の彼岸にした。ほとんど村中、大人も子供も出で魚とりをした。

稻刈りは十月二十四、五日から十一月の上旬にかけてした。時期がおそくなると、品質がおちるといわれた。

稻はたなほしにした。大だなは四、五さく刈って、四、五さくほどのとして稻をおいて行く方法。小だなは、ふつう一さくぐらいのこして、その上に稻をおいて行く方法。かわき田は一本がけで刈っていくが、しめている田は大だながりをしている。

稻は五日ぐらゐ干しておき、それからヨツラでまるって家へはこんで種こきをした。

稻こきは、麦まきが終つてから十一月にした。

麦まきは十一月の二十日頃までに終る。

麦まきが終ると、ねずつぶさげのやきもちをやいて祝つた。材料は米粉。あがは、するすがかたづいてから。十一月のはじめに、嫁を里方へ体をやすめにやつた。

麦ふみは、早まきで年内にした。春蚕は五月五日ごろはきた

て、六月のはじめに上簇、六月十四、五日頃に出荷、秋蚕は七月末から八月、二日頃にはきて、八月二十一、二日頃に上簇、八月末にまゆかき、出荷となる。晚秋蚕は秋蚕をかたづけてすぐはきて、九月の彼岸にあがれば早い方、十月の上旬に出荷した。(上矢島)

タツチベー 田植えしてからはえるひえ。
ゴンゴンメ 梅の実、普通より大きい。
マンダソフクリ・ケバスククリ

普通より大きいくり。

(東新井)

2 養 蚕

蚕 藤 種

イタリーへ輸出して大失敗をしたことがあった。菜種をはりつけて輸出したという話も聞いたが、それよりも微粒子病菌があつて、全部焼かれてしまったのである。

ところはヒラヅケと呼ばれて、一枚の種紙に、一〇〇ヒラヅケ、八〇ヒラヅケ、五〇ヒラヅケなどがあった。その後一粒ずつける一粒攤、つづいてイタリアから種が入つて、二三十年後にはこちらでもできるようになった。(小此木)

蚕 藤 育 法

明治初年、この村の閑口きいさんが、女の身で奥州(白河あたりといふ)へ行って、温査飼いを習つて來た。そのころまでは、春蚕で四〇日から四五日も飼育日数がかかるのを十日も縮めた。きいさんの蚕育も、一回の失敗はあつたが、これから急にこの温査飼いがはやつた。もつともこのほかに、高橋式の温査飼育法といふものもあつた。また松まきや根っこをくべいでして飼育するイブシ飼いはその後はやつた。(以後秘密飼い、箱飼い、桑桑育、土室飼いなどいろいろに變つて来た。(小此木)

蚕 祝 い

カイコイワイまたはヤスマイワイと言ひ、蚕が休む(脱皮)たびに行なつた。頭、団子、餅などをつくつて蚕神様に上げるといつて、蚕の棚の一隅などに上げない場合は食べなかつた。(小此木)

蚕 の 变遷

明治初年のころは手まげだった。板にカンの棒をさして、それでカヤを折りまげ、しばつてシマダにした。大正初期に機械の二角式が入つた。その後改良旗が發明された。境町

にはその機械をつくる工場ができて、一名境旗とも呼んだ。それが今まで
は、回転旗になっている。(小此木)

蚕 神

邑楽郡小泉の稻荷様へは、毎日の一日、十五日にはよくお参りに行つた。揚き立て前の四月には、甘樂郡の稻含山へもよく行つた。これは蚕のある九月ごろまで行く人があった。蚕影山の掛軸はめいめいの家にあって、正月、初午、養蚕前などには床の間にかけて祭つた。また節供に飾る普通の雛を、蚕の間中、神棚などに置いた。金子隸一郎氏の「庭から生まれたお蚕」には、この町の島村地区において蚕の守り神である紙人形をかざることが記されているし、筆者も同地で、それを確めたことがある。その人形をコダマサマと呼んでいる。雛人形も、もちろんコダマサマなのである。



昔の図絵に載っている小此木の渡間社

しかし村内において最もさかるのは、内田氏宅にある浅間様である。木花咲耶姫を祭る。五日申が日が祭日で、その日は、村内はもちろん、新田・佐波・山田・勢多の各郡、遠くは埼玉県の児玉・大里・秩父の諸郡からも参詣に来

た人たちは、米三合を持参してオクチドメをしてもらつた。内田氏方では、それを護摩の火にあて、神札、御幣、角釘とともに与える。その米は、鼠の出そうなところへ置き、神札は、蚕室に釘でとめておくと、鼠害から守られると信ぜられていた。(小此木)

ウジ神様にまゆがよく取れたら進ますとお願シヨウして、春蚕や秋蚕が取れたら、まゆを五個吊るして供える。また、蚕をはきたてた種紙はもつたいなくて人の踏む所に置けないから、紙に包んでウジ神様に上げて置く。

名和村芝の稻含神社は蚕神なので、まゆ玉を借りて來て豊蚕を祈り、取れてからまゆ玉を2倍にして返す。また、株名神社の蚕神にお参りして、供え餅を一個借りて来て、蚕が当たつたら二個にして返す。

昔は越後からゴセさんが来た時に、泊めてやると蚕が当たるといわれた。(伊与久)

3 織機り

はたおり

いま七十ぐらいいの娘時代のはなしだが、当時ははたおりと糸ひきが出来なければ、よそへ嫁にくれなくなるとももらひてがなかつたという。すこしうらい人間が足りなくとも、はたおりや糸ひきが一人前に出来れば、嫁に行けたという。家に三人も娘がいれば、蔵がたつたとまでいわれた。

この辺でははたが一番よかつたのは大正七、八年頃で、伊勢崎銘仙の最盛期であった。その頃は、女人人がいはつていた。「人前の男がくたをまいてやつて、かみさんのかせぎで、男が上酒を飲めるような状態で

あった。かみさんのゼニで田地を買ったものもあつたほどであった。

(木鳥)

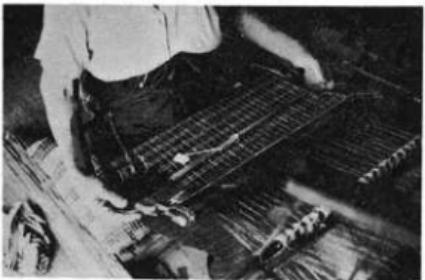
織った。このようにして伊勢崎銘仙はできた。イザリバタシの次に、明治末年に近くハンバタシやタカバタシが出たが、イザリバタシで織った方がものがよいともいう。

イザリバタシ名業

オマキ 織る糸を巻きつける巻き棒
ナカヅツ 三本棒によって三角筒をなしている。
オサヅカ・オサ マイサラマキ 織った布を巻きつける棒



イザリバタ 小林いちさん



いざり機については「境町資料」⁵⁸に同じ人についての聞き書きが出ている。
があるて、これを見でひいたり、ついたりして糸を上下させる。

ヒ
スノモチ 布をおさえる
トリイ 上方に鳥居の様に出ている部分、これにヒキヅナ
カケイト
シシボウシ
シバキ 布をまきつける。

明治四十年代までは藍玉を造った。当時は年間七〇〇八〇俵も造ったといふことがある。

4 藍玉・藍ネセ

小此木の石原善平氏宅には藍玉を造った時の臼と杵が遺っている。

明治四十年代までは藍玉を造った。当時は年間七〇〇八〇俵も造ったといふことがある。

原料の藍は自宅でも作つたが、近村から大部分を買つて来た。開花前

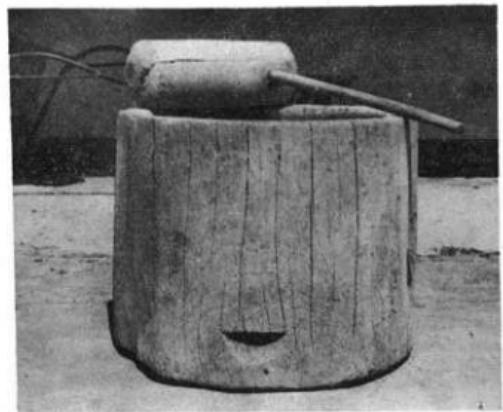
の藍を刈りとつて、これを乾燥し、干上つたものを切り刻み、これに霧をふいて二三尺の厚さにつみ重ねてねせる。三〇〇五〇日もねせてお

くと、その間に熱を出して発酵する。それを白に入れてつく。石原氏宅では、四升だきの臼で、一〇人ぐらいいの使用者が三日もかかつてついたということである。ついたものは放置しておけば自然に乾燥して藍玉になる。これを紺屋に売るのだ。

ひところは降ろうが照ろうが、必ず馬をひいて買いに来たものだが、明治四〇年代にドイツの染料が入って来てからベタリと来なくなってしまった。(小此木)

5 職人の村

上古屋はむかしから職人の多い部落だ。農地が狭く、經濟的に上下の差が大きかったので、下層の者が職人によって生活の足しにしたのだと



藍のうすときね一小此木石原善平氏宅

いう。今では大方百姓專業になつたが、以前職人だった家は多く、それが屋号となって、現在でも呼ばれている。

職人 屋号 姓

紺屋	コウヤ	内田	四代前まで
籠屋	カゴヤ	井上	三代前まで
鍛冶屋	カジヤ	高柳	二代前まで
野鍛冶	ミツボシ	堀込	
大工	カネシヨウ	ナカヤ	

鍛冶屋	ナカヤ	内田	二戸あり
左官	カジヤ	内田	山田
七兵衛カジヤ	カネシヨウ	内田	内田
岸	カジヤ	内田	内田
(小此木)	(小此木)	(小此木)	(小此木)

6 災害

霜害

この地方は、蚤場であり、霜害については敏感であるし、また目だった霜害もあった。井上愛吉氏(明十四生)の記憶では、明治一十六年に大霜があり、その後一三年続けてあつた。昭和五六年ころにもひどいのがあった。こうした時には、せっかく芽ぶいた桑も、まつ黒にこげてしまうのである。予防法としては、麦ぬか等を置いてこれに火をつける程度で、呪などはない。

福寿院の庭には、中世の板碑を利用した碑が建ててある。表面に

(裏に)

百穀音大士 明治廿三年三月

信心講中

(小此木)

洪水



中島の民家 わずかに土盛し、コンクリートで固めてあるのは板倉のミヅカの系統に属する。

広瀬川の改修は、昭和二十八年であつて、それまではしばしば洪水に見舞われた。中でも明治三十一年、四十三年、昭和二十二年等が記憶に残る。昭和二十一年のカスリーン台風の時は、床上一尺五寸ぐらいの浸水であったが、明治四十三年の時はひどかった。一波一浪ふえて、堤防の上四尺にも達し、床上浸水四尺五寸くらい。牛を二階へ追い上げたら、下ろす

のにたいへん骨折ったという話もある。

洪水は堤防の決済ばかりでなく、ノミズといわれるものは、雨水によつて、用水の氾濫するものである。

板倉町にみられるような、ミヅカの称呼は聞き得なかつたが、民家は、やはり若干の土盛りをし、その上に建ててある家は、多く見かけた。(中島)

ノミズ 雨が沢山降つて、烟から水が出て来る。(保泉)

労 働

はじめに

個人労働・共同労働等多いなかで、主として後者が調査された。そのうちで、結（ゆい）は、エー・テマツカーリの二語の併用される地域である。エー（ゆいの系統）は、県下一般に広いが、テマツカーリは、邑楽郡において使用される。この結が、最近、陸田の増えるにつれて多く行なわれるようになったということは、結が、田植を発生の基盤とするという一般的傾向を表わしている。

4の雇傭關係において桂庵の伝承が生きくと語られているのは、伝承者が比較的最近まで實際に体験して来たことだからである。桂庵が公的に認められなくなつて、職安は桂庵だけの世話をしてくれず、困つてしまつたのは伝承者たちであつたのである。

桂庵によつて世話される日傭たちの出身地や移動の経路が語られてゐるものおもしろい。筆者が多野郡上野村白井において聞いたのは、信州からの董日傭は、まずこの島村地方の上旗をすませてから上野村に来て、そこを終して自分の家の上旗をするということであった。越後の者が、自家の田植後、上州の谷づたいに上流から下流に日傭にして、終つて自家の田の草取りをするのと、ちょうど逆であるのがいさか面白い点である。

1 労 働

スケット 家の新築、普請、蚕室つくり、耕作關係では災害等の場合

に行なわれる。義務でするのだから賃銀を払うことはないが、食事ぐらいた然出だす。これには日数の制限はない。話者の家は明治四十四年に建てられたが、その場合、母屋だったから村中からスケットが来た。出来上った時は、様上げの祝いには招待される。

ウケトリ 主として農作物の作業がウケトリ仕事となる。麦刈りなら一反いくらときめて。

テマツカーリ 人がたのめなくなつたので最近はこれがふえて来た。しかし蚕の場合は駄目で、田植に都合がよい。この村でテマツカーリがふえて来た原因は、最近陸田が増えて来たせいもある。労力の交換だから、こちらから一人いったら、向うからも一人来るのが原則であるが、向うから三人来てくれるような場合は、その分だけ適当に謝礼する。これをまたエシゴトとも言つてゐる。

ソヤイ仕事 このことは聞いているが、實際に仕事をしたことはない。何でもいっしょに仕事をすることらしい。（中島）

スケット 家普請の際など、地行、とりこわし、上棟、瓦上げ、壁ぬりの際など、近隣隣組の者は、「役にも立たねえが使ってくんなんしょ」などといってスケットに行く。金銭、給料を一切考えずに手助けをする。

ウケトリ 請負い。桑烟うないに多かつた。

エー・エグーン、結田がなかつたのであまり行わわれなかつたが、最近陸田がふえて来たので少しはエーも行なわれる。

ソヤイ仕事 なわい、蚕の網こしらえなど一しょにやつたことはあ

る。しかしことばとしては明確ではなかった。(小此木)

村人足 もとは鎮守様の草むしりなど道普請程度。堰普請はコーチごとにした。道普請はコーチの道で、巾六尺以上のところをする。村道まで、県道はやらない。(木島)

イイ

養蚕、田植、畑作などで忙しい時に本家、分家でお互いに手伝い合う。これをイイと云う。(下瀬名)

エエシゴト

村うちで仲のいいもの同士がする。エエシゴトはかえすのはちがつた仕事でもよかつた。また、いつかえしてもよかつたが、大抵その年のうちにかえした。

エエガエシははなしやすい、てきとうにかえしたた。とえば、男のさくきりに対して、女が着物をぬってかえすという形もあつた。(木島)

2 労働を評価する慣用句

モノグサ者の節供働き

キカイ 機械のように休まず働く人

クソツカセギ ただ無茶苦茶に稼ぐ人

キヨウビンボウ 器用貧乏

ハツサイク(八細工)身につかず
ナキダレ すぐに泣きごとをいう人

(小此木)

三日坊主 すぐあきる人
ノラクラモソ 怠け者

(中島)

働きものることは、セイシヨウがいいとか、セイヨンがいいという。怠けものにとっては、ノメシャという。

い。
苗取りでは、男ではふつうのもので五畝分ぐらい。
桑つみは、男が秋蚕で二十五貫ぐらいめばつよい方。ふつうでは二

仕事の下手のものはブキといい、上手なものは器用とか上達といい。
能力のないもののは、ノロマとが七厘とか、天保錢という。(木島)

3 一 人 前

男子一日の作業量

妻の一一番作 一反五七

桑原うない 一反

固地うない 陸稻あとは 三七

豆あとは 五七

桑摘み 佐一、十文字等の桑、葉の小さいもので二〇貫

女子一日の作業量
イザリバタで三日に一疋。

(小此木)

一人前の仕事の量は、男十に対して女は八の割合。賃金も男十に対し

て女八の割合。

裁縫では単衣の場合は一日に仕立て縫って仕上げるのが一人前の仕事。

あわせは一生懸命縫って一日で仕上げれば一人前といった。

半天は仕立て半天ぐらいで仕上げれば一人前。羽織も同じくらい。種

の植えつけは、男の早いものは、とつたり植えたりで一日に一反、ふ

つうでは四人で一反という。うえつけだけならば、一日で五畝ぐら

い。うでのつよいものでは六畝ぐらい、女も大体同じくらい。

苗取りでは、男ではふつうのもので五畝分ぐらい。女は男の半分ぐら

十貫ぐらい。女も同じくらい。

草刈りでは、男で朝飯前（六時半か七時頃にかえってきて）五、六貫ほどがふつう。

さくきりは、男で春っさくが一日一反は業だという。

一般に女は力仕事で男に劣っているといわれている。男女とも同じという仕事は柔つみと田植、収穫については、女の方が男よりも働くという。

年令の範囲で一人前といるのは、二十才から四十四、五才ぐらいまでで、男女とも五十才ぐらいが限界。

村人足では、十八才ぐらいから一人前につかってた。

ヒトツキリ 一、二時間のこと。朝飯前の仕事のときなどにいう。

（木島）

4 雇傭関係

日傭、雇傭関係でいちばん短期なのは日傭である。これをまたトビヒヨウまたは単にトビとも言い、その日その日に勘定した。今でも日傭のうち、短期で、その日その日に勘定するのをトビといっている。

番頭さん（作男） 作男を頼む家はそうたくさんはなかつた。この場合に年ぎめが主で、十五円とか、十八円とか、きめて来てもらつた。もちろん戦前の話であるが。

盆・暮にはシキセをやつた。シキセには、ぞうり、甚兵衛（格子の柄、半反ができる浴衣のような着物）、地縞の着物、筒っぽう、足袋等があつた。物日には朝つくりぐらいでもやれば、のんびりと遊ぶことも許された。

デカワリは二月中。この日と盆・正月には正式に帰宅することが許された。

子守り 今の五十才から上人は、あまり学校にも身にしみて行か

なかつたし、また子供も多勢生んだから、たいていの家で子守りをたのんだ。（小此木）

（蚕日傭） 蚕の本場であるから、どこの家でもすいぶんたくさん飼つた。そして上族前の七日とか十五日ぐらいは、蚕日傭を頼む家が多かつた。中には三〇人も四〇人も頼み、太鼓をたたいて飯の合図にした家もあるくらいであった。

蚕日傭の出身地は、信州、茨城、栃木、沼田、新田郡大原、勢多郡柏川村地方から來たが、これは世話をする桂庵の得意先によつてどこの人がおよそ決つてた。桂庵は人手が足りなくなると、どこへでも行って募集して来た。その後桂庵がだめになつてから、人手を得るために不便することが多くなつた。

明治末年から大正の始めにかけては、その桂庵が大活躍をした。境にも、武士にも、下古屋にも、どこの部落に行つても、一軒や二軒の桂庵があつて、蚕日傭はそこをヤドとし、またタマリとも呼んで根拠にしてゐた。日傭たちは、桂庵のことをオヤブンと呼び、桂庵は、日傭に対してワカイシュウ（男）、ムスメ（女）と呼んでいた。

桂庵は日傭いをつれて来て、「うちのムスメを使ってみてくんない」といつて置いて行く。三日目に再びやつて来て、そこで二〇銭とか三〇銭など、性别や年令、働き具合その他の条件を考えて給料を決めて行く。仕事がすむと、給料は桂庵に支払う。桂庵は、両歩といつて、雇傭双方から各々五分ずつの歩をとつた。そのほかに、雇主では、働き具合によつて、一円とか、五〇銭とかの給料以外の心付けをしたものである。

食事はもちろん雇い主の家である。大体家族と同じものであつたが、家によつては、特別悪い待遇をする場合もあつて、一様ではなかつた。そんな場合日傭たちは、雇い主に対して、「ダンナ、ダンナ、米のつるんだん（押麦）が出て來たよ。」なんて報いることもあつた。どうせこの地方は、米はみな買つたのであるが、中にはわざわざ日傭のために雨

京米を用意する家もあった。また一俵の麦の中に米の三升もまぜれば上等というひどいものもあった。

新地島村 屋造りやよいが

釜のふたとりや 鬼が出る

という桑摘み唄は、蚕日傳たちの悪口から出たものであった。

(以上小此木)

中島でも同様であった。オヤブンは權威があったもので、ワカイシユウヤムスメが文句を言っても、「テメーラ ワガソマ 言ウナ。」とおどしつけたものであった。

蚕日傳は、こゝをすませて利根郡に行き、その後信州の南佐久へ行つたということである。やはり桑摘みに

蚕しまえば沼田の城下

連れて行くからしんばしな

というのである。(中島)

○出がわり

旧二月一日である。作男はこの日に錦打村の上中にある出がわり稻荷にお参りに行く。今でも祭典があるはず。

おかげらを上げたりする。(上源名)

奉公人の出かわりは二月一日。(木島)

○雨いわい

久しぶりに雨がふると、うちつきりで祝つた。(木島)

○農休み

区長会議できめて、区長の名前ではりふだを出した。

最近では、境町のまつりの日にかねて農休みをするようになり、境町全体の農休みとなつた。(木島)

交 通

はじめに

陸上交通としては、境町は日光例幣使街道の宿駅であり、本陣・問屋もあって栄えたところである。しかしこれは歴史の問題であり、伝承的なことは、今回の調査に洩れてしまった。

ただ関東地方の大動脈である利根川は現在と比較にならぬほど重要な役目を、以前の交通史上に果して来た。利根本流に臨む平塚には有名な平塚河岸があり、旧島村のことについては金子鉢一郎氏の「島村小史」に貴重な調査がある。いまは、今回の調査のみについて一言しておこう。

利根川の支流広瀬川も河川交通上重要な位置を占めるが、その中島部落も、かつてはむしろ川を頼りにする船頭の村であった。しかし高崎線の開通によって、船頭が岡に上って煙作に従うより他はなかつた部落である。以下の伝承は、船頭たちが岡に上つてすでに三・四代経つている。従つて伝承は淡々として不確かになっている。しかし話の印象深いところだけは残されているように思われる。

船頭の氣は荒かつたらしい。下りでは、幸手、栗橋あたりで泊つて江戸へ出た。帰りは、三・四艘もつないで、ひき舟で上つて来た。はだし、はだかで。しかも冬でも冷たがらないのが船頭のハバだったらしい。

河 川 交 通

い。

金もずいぶんとつたらしいが、船頭は、宵越しの金は持たないと言つていたから、船が河岸に着くと、酌處にひつかつてたいていつかい果し家にはあまり持つて来なかつた。

帆かけ船もあつて、春になって東風を待つて、上つて来たものであつたが、上武大橋ができるから、ぱつたり来なくなつた。主として石の

運搬に

当つた

石船で

上流か

ら石を

下げて

船頭は

やはり

索き船

であつた。



浅間山焼けの流死人の靈を供養した石塔—中島

伴右衛門がオッホを持っていた。大きな船で、五・六人で江戸から品物を運んで、オコヤに上げて、伊勢崎様に上げた。明治初年のことであつた。こゝからはひき船で伊勢崎まで行つた。その時竹わらを用いた。これは竹の外皮と内皮を除いて中間を薄くそいで繩にしたのであつた。伴右衛門は問屋であつて、オコヤを管理した。オコヤには伊勢崎の荷を

置いたが、こゝからはダチソマ道によつて伊勢崎まで荷を運んだ。小屋は奥行三間か三間半、間口五間であつたが、水害の時流れてしまった。



渡良瀬川一中島附近、むこうの橋は島村に通ずる—

の仕事であつた蚕飼いになつたのである。(中島)

問屋のほかに船を持つている者をフナモトと言う。多くの者は船頭として働いた。だいたいこの中島は、三と四代前までは、ほとんど船頭の村で、利根川が活動の舞台であった。船頭の合間に、博奕をやつたり、女郎買ひもしたらしく、そんな話もしょっちゅう聞かされた。

明治になつて、船頭の仕事がなくなつてから、陸に上つて、女衆